

41432

教科書文庫

4
8/0
41-1931
20000 40290

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

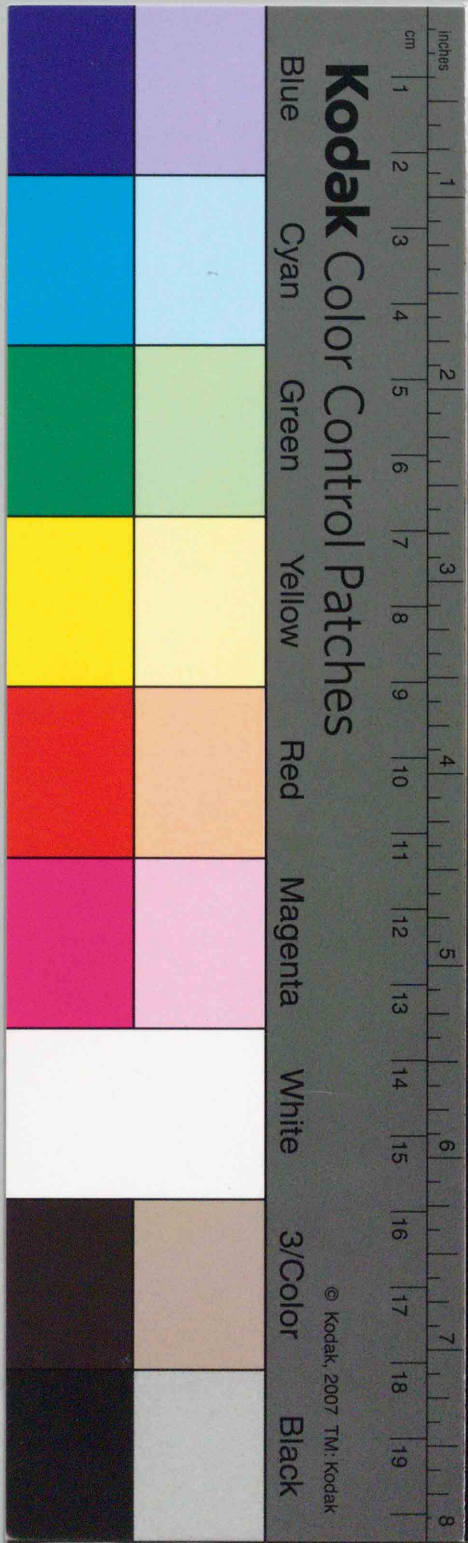


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

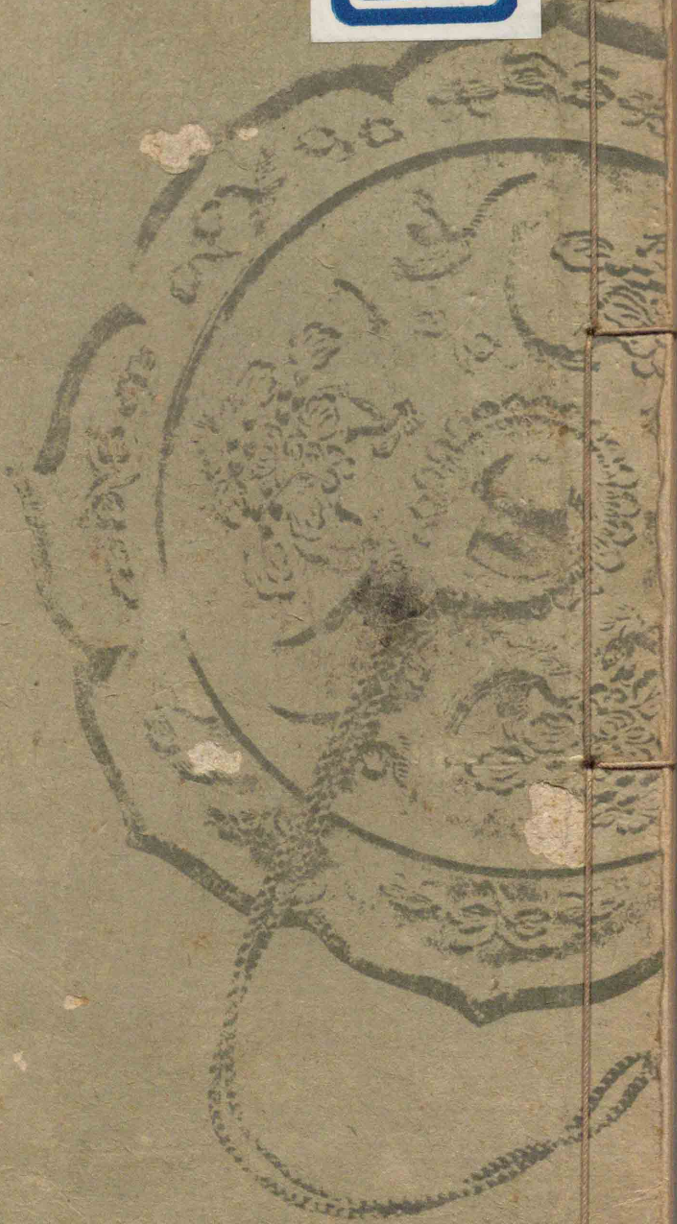
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Y019
資料室

訂三
斤
日本讀本
吉澤義則編
十



3759
Yol 9

資料室



行之
新日本
讀本

昭和六年十一月二十八日
中學校國語漢文科用
昭和八年七月六日
實業學校國語科用

文部省檢定濟

修文館發行

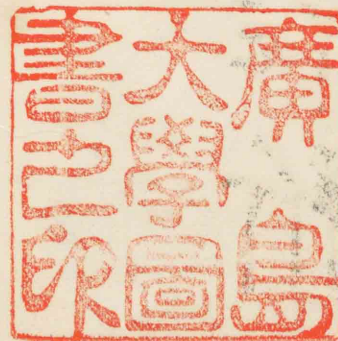
井永壽不實

唐島島三廣島三堂學校
井子野下正實



(第十課參照)

(筆起光佐土) 風秋の磨須



卷 十 目 次

一	自國を凝視して	二	荒芳徳	一
二	國民思想の變遷	藤岡東圃	二七	
三	吾人は須らく現代を 超越せざるべからず	高山樗牛	二六	
四	雅文抄			
一	知足庵の記	(琴後集)	三一	
二	漁村	(檀園文集)	三二	
三	掃衣を聞く	(泊酒舎集)	三四	

四 漁父辭

(泊酒舍集) 三五

五 俳文抄

一 落柿舎の記

(風俗文選) 三六

二 蓑蟲説

(風俗文選) 三七

三 百蟲譜

(鶉衣) 三八

六 新島守

(増鏡) 四三

七 大原御幸

(平家物語) 五三

八 若國日本

(諸家) 六三

九 伊勢物語抄

一 都鳥

六六

二 小野の雪

六九

一〇 須磨の秋風

(源氏物語) 七二

一一 枕草子抄

一四 季

八〇

二 香爐峰の雪

八一

三 にくきもの

八二

一二 萬葉集序説

佐佐木信綱 八四

一三 萬葉集より

(諸家) 九一

一四	倭建命	(古事記)	九六
一五	國民的自力主義	徳富蘇峰	九九
一六	生活の中心	阿部次郎	一〇七
一七	人生の目的	三宅雪嶺	一二六
一八	日本文學研究の新意義	藤村作	一三九
一九	上古・中古文學	編者	一四二

終



三訂 新日本讀本 卷十

二荒芳徳
貴族院議員、伯爵

一 自國を凝視して

二 荒 芳 徳

日本現時の思想界は紛糾を極めてゐるといふ。これは事實だ。しかし、これを以て秩序なき渾沌と観る事は當らぬ。予は寧ろ秩序ある紛糾と観る。

何故に「秩序ある紛糾」と観るかといふに、生命なき陋習を去つて、新しき生命を捉へんとする努力を動因とした紛糾であるからだ。

以下數個の題材を捉へて新しき生命を直視せんとする現代の青年と、舊套を脱せざる老人との思想の相違に就いて吟味し

舊套を脱す

て見たい。

一部の青年は從來の忠君論に對しても、又愛國論に對しても、甚しく不滿を抱いてゐる。

從來忠君と云へば、常に直接天皇及び皇室に對し奉る忠純なる行爲を稱し、愛國と云へば、常に直接國家を對象とする眞摯無私な活動と解せられてゐる。而して各個人の私生活、即ち直接に皇室又は國家を對象としない行爲は、如何に眞摯純誠なりと雖も、其は忠君愛國の行爲とは稱せられてゐない。

一例を以ていへば、或村に一軒の豆腐屋があつて、毎朝雨の日も、風の日も、最も誠實に、清い味のよい豆腐を作つて、戸毎に鬻ぐとする。從來の忠君愛國論からすれば、彼は固より君に忠なるものでも、國を愛するものでもない。併しながら、彼の豆腐は村民の最も安心して買へるものであるとするならば、これは實に

聞達

自負
欺瞞

彼が自己の生業に忠なるばかりでなく、村民にも亦國家にも忠實なるものであるといはなければならぬ。

又茲に一人の畫家があるとする。彼は特に口に國家に對する愛を言はぬ、又別に皇室に對する忠を言はぬ。併し彼は名利聞達を餘所に、自己の畫道の研精に日も夜も足らず、彼の全生命を捧げて孜々として努めてゐるとする。この様な行爲は、直接には國家を對象としてもゐなければ、皇室を對象としてもゐない。しかし、彼自身はこれを自己自身の天職と觀じ、眞面目なる自己發現に努力する時、是は明らかに彼が全生命を日本我の榮光のために捧げつゝあるのであるから、彼を忠愛の國民なりと呼ぶに躊躇すべきでないのである。

之に反して、自ら忠君の士たるを自負し、口に愛國を唱ふる政治家と雖も、彼の一舉一動が多く欺瞞を以て充たされ、目前の私

利私慾を逐ふに急にして、國家百年の計を立つる努力を缺いて
あるならば、彼は斷じて忠愛者ではないのである。

今日の先輩は、今日の青年の氣風を憂慮し、彼等が有する國家
心の薄弱を慨嘆する。さうして焦慮躁心の結果種々の對策を
講ずるが、多くは肯綮に中らないで、徒に新時代人の反感を買ふ
が如きは、何故であるか。

予は今最も率直に、明治時代人の忠愛心と、大正時代人の忠愛
心との範疇が、甚しく相異なる事實を、茲に述べねばならぬ。

明治時代を創造するに當つて掲げられた國民的目標は、勤王
討幕の大旗であつた。明治の大維新を完成したのは、先づ内治
外政に能力の乏しかつた徳川幕府を倒して、錦旗の下に國家を
神武創業の昔に歸さうとする國民先覺者の運動であつた。さ
うして、此の回天の事業は、上明治天皇の御聰明御果斷によつて

焦慮・躁心

肯綮に中る

範疇

回天の事業

違算なし

違算なく成就された。

明治維新の大業を恢弘にすると云ふ國民的生活信條は、その
時代の各人の頭腦に頗る色彩鮮明に印せられた。明治時代の
約四十年間は、國民は常に緊張の生活を續けた。曰く征韓論、曰
く日清戦争、曰く北清事件、曰く日露戦争と、新興の日本はこれ等
の大事件のある毎に、自己の實力の或は足らざるを怖れて、所謂
人心慘として驕らざるの精神を保持して居た。

此の時代の國民思想を誘導したものは、皇室を絶対高位に置
いた尊王主義であつた。この時代、天下は翕然として皇室に歸
し、「朝廷」「禁廷」「お上」等の一語は、端的に直觀的に、その時代人に炎
炎たる熱情を燃さしめた。其には何等の説明も要しなかつた。
明治維新の大業を翼賛し、先帝の賢臣、良弼となつた諸卿は、國
歩頻に艱難を加へたその當時の日本を擔任し、眞に一身を捧げ

慘として驕らず

翕然

端的

良弼

て、自己の信條に殉ずる意氣を有して居つた。さうして、終に新しい日本は此の時代に生まれたのだ。新しい日本の經營には幾多の困難を伴つた。而も維新を成就した人々は撓まず屈せず、明治天皇を中心として孜々營々、新國家の再建に盡くし、終に日本をして世界列強に並馳するに至らしめた。

顧みるに、明治維新は實に目覺ましい、且世界を驚倒させた民族的創造であつた。如何に我が先輩たる時代人が、大膽に而も周到に、且眞面目に、自己を凝視して創造を企てたかは、我々後の時代人としては、實に欽羨に堪へぬ所である。

而も、世人は何故に此の大創造が巧に違算なく運ばれたかといふ事については、明治天皇の御果斷を擧げ、國中雄藩の協力を數へ、義を觀て勇なる國民性を説き、外國の壓迫を因となすが常である。

欽羨

官能本位

歎々

眞諦

光彩陸離

靈感的衝動

これ等は固より皆重要な原因ではあるが、而も尙一つ多くの史家の見逃してゐる一大原因がある。それはこの時代に、日本は民族全體として大きな煩悶に逢著してゐた事である。

徳川三百年の治世は太平が續いた、そして人心が弛んだ。凡ての階級は享樂を逐うて官能本位の樂しみに耽つた。物質慾は極むれば極むる程その深きに陥り、それと正比例して人の精神を餓ゑしむるものである事は、敢て歎々を要せぬ。

徳川の末世には、人心期せずして變を求め、精神的更生の熱烈な欲求は、表面人生の眞諦を忘れて享樂を逐ふやうに見えた人の胸の奥底に、一つの力強い潛勢力として存在してゐた。

明治維新の大業の完成は、この國民的煩悶が主動因であつた。さうして、英明なる明治天皇の出現によつて、王政復古てふ光彩陸離たる大旗を仰望し、一つの靈感的衝動によつて、期せずして

億兆一心の團結を見たのである。

大正昭和の時代も今日に至つては正に國民的煩悶の時代である。國民は明治初代の如く民族の歸趨を示すべき大旗を求めてゐるが、これが未だ與へられてゐない。舊型の老人は依然明治時代の大旗を纒に色を變へて、國民に向つて「この下に集まれ」と叫んでゐる。日露戦争の後に、民心は倨傲の氣を生じた。理想なき所に貪婪生じ、信條なき所に佚樂生ずるは自然の數である。今日最も吾人の相互に弔ふべきは、吾人が或程度の迷へる兒等である事だ。

明治の志士が内憂外患交、到る國家的危機に際して、一死を賭して、新日本の建設に努力した沈痛の體驗はなく、却つて維新の制度——それは明治時代の先覺者の遺贈である——の餘光を得、時流の幸運に棹さして、今日顯著なる地位を占むる人々が、果

貪婪
佚樂
自然の數

して能く大正昭和の時代的煩悶を理解するであらうか。

今の社會的顯著者の多くは、實力才能に於てその儕輩を抜いた人々であらう。又假令維新の畫策に關與しなかつた人々も、維新の精神を繼いで、銳意これが完成に努めた人々である事も、我々は認めるに吝ならぬ。只我々の時代的煩悶が、如何に強く、如何に甚しいものであるかと云ふ一事に至つては、恐らく諒解をそれ等の人に希望するは無益な事であらう。何となれば、煩悶は人生の一つの特殊な精神的體驗であるからだ。

前述したやうに、明治維新の當時に於ては、「皇室」の一語は端的に皇室と國民との關係を心から結び付ける言葉として、當時の人心に驚くべき力を有つてゐた。大正の時代には、既に明治中葉時代までのやうに、國民が皇室に對して忠誠を竭くす以外に、世界に對する日本の國家そのものの目標が現れて來た。

従つて、最も簡潔に言へば、新時代の國民的目標は、皇室に對して忠誠を竭くすと云ふより、寧ろ皇室と一心同體となつて、日本を世界的に光輝あらしめようとする目標になつて來た。

皇室を對象としてのみ、我々國民は忠誠なるものではなく、皇室がその御信念として國家に盡くし給ふ所と、國民各自が自己の生活信條として國家に盡くす所とは、全く一致して不二なるが故に、國民は必然に皇室に對して忠誠である結果を生ずると考へるやうになつたのである。換言すれば、今日の時代には皇室は日本民族の最上位に在つて、國家に對して御忠誠であり、國民各個は日本民族の構成分子として祖國に忠誠なる結果は、當然に又必然に、皇室に忠誠であるとするやうになつたのである。この主張は、斷じて一家言ではなく、實に史籍の上に炳乎たる日本建國の大理想であり、我が國體の矜誇である。

炳乎
矜誇

希望に輝く新進の現代青年は、世界全體を視野とし、日本帝國をして世界眞善美化の國際分擔を果さしむる爲に、先づ自國を第一に神聖義勇の國家たらしめんとしてゐる。彼等に對して、世界を視野とせぬ狹量なる忠義を説いても、容易に彼等をして首肯信服せしむることは出來まい。

何となれば、現代青年の忠誠は日本國全體に對するものであり、同時に日本國民として世界人類に對するものであらねばならぬからである。今の老年の多くは、既に軌道に乗つた明治時代の日本を經營し來り、概して順調な日本を預つて來た。故に多くは眼前の事實を重視し、遠き將來の計畫を輕んずる傾向がある。然るに、現代の青年は一度校門を出ると、その接觸する社會は學校で想像したやうな立派な社會でなく、國家は天然資源の缺乏、人口の過剩、國際關係の窮況等に立つを見て、日本民族は

將來如何にして世界に立つべきかの問題に想到して、うら若いその胸裡には遂に煩悶なきを得なくなるのである。

此の如くして、現時代の青年は時代的煩悶と環境的煩悶との眞中に佇立する。人心殆からざらんとするも豈得べけんやである。

抑、我が皇室と國民の關係は、これを例せば恰も日輪と日光の如きものである。日輪の赫々と輝き、吾人をして仰がしむる所以のものは、その日光が輝々として照り渡れるからである。日光照らざれば、日輪恆在すると雖も、吾人は日輪の存在を常に確認する事甚だ困難である。それと同じ様に、國民が自らその行爲行動の上に於て輝くならば、皇室の御光はそれと正比例して輝く、國民輝かざれば、皇室の御光も亦輝かぬのである。

日輪は中心で、日光は延長である如く、皇室は中心で、國民は延

長であると云ふのは正しい見解だ。同時に日光なくんば日輪の日輪たる所以なきが如く、國民なくんば皇室の皇室たる所以はないと云ふ見解も正しい。又日光は日輪を離れては存在しない如く、國民は皇室を離れては存在しないと云ふ事も正しい。日本の魂(又は生命)と日本人總てとは離れて存在し得ないものであることを確認する者は、皇室なくては我々は日本國民として存在しないものであることも確認するであらう。皇室と國民との共同始祖に渡らせられる皇祖宗を中心とし、君民一體となつて、各自己の分擔によつて、民族的理想の實現に盡瘁すべき大抱負・大信念を培養・生長させて行くことが、今日の急務である。老年も青年もこの點に於て一致しなければならぬ。

我が歴史や乃至國民道德の書は、天皇の御仁慈、皇室の御愛民の御事蹟を多々記述してゐるが、天皇の御徳は仁慈愛民といふ

やうな對國民的なことに止まらずもつとく深い民族的信念に根ざしてゐる事を忘れてはならぬ。日本國民は、古來國家天皇に對しては一死を以て盡くしてゐるが如く、天皇及び皇族も、祖宗及び國家に對しては國民の先頭に立たせられて、御忠誠を御竭くしになつた。歴史に現れた、神武天皇の御東征に、皇兄五瀨命を失はせられた悲壯な事實や、日本武尊が僅か十六歳の御身を以て、艶麗なる少女に身を扮して巨賊熊襲を誅せられた決死的奇襲や、龜山天皇が元寇の際身を以て國難に代らんと伊勢神宮に御祈誓あつた事や、近くは明治天皇が衆に先んじて、維新の大業を御斷行になつた獻身的御行動の如き、皆これである。歴代天皇の勅語の中に表れた御詞にも、祖宗に對する御責任より、現國家の美化淨化善化を御天職となさせられる、祖宗に對し將又國家に對する、實に純眞な忠誠の御精神を拜することが出

五瀨命

鷦鷯草葺不合尊の第一皇子、神武天皇の同母兄、紀伊國水戸にて薨去。

日本武尊

景行天皇の皇子、この時御年十六。

龜山天皇

第九十代、文永八年(一九三)天皇蒙古の難を大廟に告げ給うた。

來る。

抑、天皇皇族が國家に御忠節を御盡くし遊ばされる事と、國民が國家皇室に對して忠純なる事とは一に歸して、祖宗の遺訓を恢弘にする所以であつて、君民忠節の對象は祖國自身であり、國體自身であり、更に語を換へて言へば、國家人格の發揚といふ一事が、君民の同始祖たる皇祖皇宗の遺訓(即ち民族的理想)によつて統括されてゐる。これが他邦の追隨を許さぬ重大點である。要するに現今日本の思想界は紛糾してゐる。しかし、これは正に、新しき思想を産まんとする序曲としての紛糾であり、寧ろ秩序ある紛糾である。もしこの潛勢力ある紛糾の真相を究めずして、輕々に事を斷ずるならば、その結果は却つて、日本の偉大性を完成する障礙となるであらう。嗚呼、人類この地上に生じて數萬年、東西の二大文明の生じて

序曲

數千年、この二者が日本なる東海の列島に相會して數十年なるを考ふれば、日本の思想界の紛糾するのも寧ろ當然であらう。さうして、この紛糾を姑く第三者の地位に立つて大觀すれば、寧ろ思想界の大壯觀である。急流相會する所、波濤高く騰り、潮勢相回る所、渦旋深く沈むやうに、日本の思想界は現に沸き立つてゐる。この荒海を乗り切るを得るか否かは、只國民の自信と膽力との如何に由る。新忠君愛國者は必ず輩出するであらう。民族的自覺者ははや擡頭しつゝある。さうして、それ等の忠君愛國者、自覺者は古い忠君愛國者に對する一つの抗議者であり、同時に自國總體を凝視した復古論者であるであらう。

藤岡東圃

名は作太郎、金澤市の人、國文學者、文學博士、前東京帝國大學助教授、明治四十三年歿、年四十一。

磅礪

記紀

古事記と日本書紀。

二 國民思想の變遷

藤岡東圃

上古は日本固有思想の磅礪せる時代にして、その文學も、國民本來の雄大快活なる性情があるがまゝに表現せり。記紀の傳説、歌謠、祝詞など、即ちこれなり。儒佛二教の傳來と共に、文化は長足の進歩を遂げ、文學美術皆これが感化を蒙れりと雖も、なほ急劇に國民根柢の思想を變化せしむるに至らず。奈良朝平安朝は、儒佛の影響の著しき時代たるに相違なきも、一面より考ふる時は、また、太古以來の國民性の最も爛熟せる時代と謂はざるべからず。

平安朝に於ては、漢文學大に行はれ、わけて嵯峨天皇の御代の如きは、詩賦唱和の風盛にして、文章博士の名獨り他を壓したるは事實なれども、これを以て儒教の勃興せるものと見るべか

準繩

らず。佛教亦同じく、文學美術上の勢力は否むべからざれども、世人の内の生活には、させる交渉を認むるを得ず。要するに、これ現世佛教なり。さらば、平安朝に於て、道德を支配すべき準繩は如何なりしぞ。當代貴族の間には、情念趣味を重んずる風ありて、その結果は、情趣の中庸を得るを以て、道德律と爲すに至りしなり。

中古は如何。さしもに腐敗を重ねたる佛教も、平安末期より面目を一變し、淺薄なる形式的現世的色彩を脱して、著しく宗教的・内容的傾向を帯び來れるを見る。淨土一向宗生まれ、禪宗傳はり、日蓮宗起りたるは、時世の要求の然らしめし所にして、その新たなる教義は、大いに國民の覺醒を喚起せり。僧侶は奈良朝このかた、外國文明の輸入者として、一國文化の上に主要なる地位を占めきたりしが、鎌倉以後は殊にその然るものありて、衣食

淨土宗

高倉天皇安元元年(八三三)僧源空の創始した宗派。

一向宗

淨土宗の分派、鎌倉幕府の時、親鸞の創始した宗派。

禪宗

文徳天皇の御代に渡來し鎌倉時代に盛になつた支那の宗教。

日蓮宗

後深草天皇建長五年(一一九三)僧日蓮の開宗。

五山

京都の五山は南禪寺・天龍寺・建仁寺・東福寺・萬壽寺。「鎌倉の五山」は建長寺・圓覺寺・壽福寺・淨智寺・淨妙寺。

住の如き、此に一轉期を劃し、寢殿は書院造となり、饅餛・金團を食ひ、茶の湯はじまるなど、皆禪僧の傳ふる所にして、佛像以外の繪畫さへ、すべて佛教趣味を帶ぶるに至りしも、五山等の影響より出でしこと疑を容れず。かく、鎌倉以後、佛教は深く人心秘奥の琴線に觸れ、また平安舊時のものに非ず。乃ち文學も佛教思想を中心とするに至れる、もとこれ自然の數のみ。翻つて思ふに、平安朝の文學は貴族公卿の文學なり、而して、公卿の文學が古傳を株守して沈滞せる間に、實力はやく僧侶に移れるなり。平家物語は、灌頂の巻を置き、六道の沙汰を説けるにあらずや。謠曲の多くは、佛教的色彩を帶ぶるに非ずや。繪卷物の殆どすべては、神佛の炳焉たる靈驗を説いて、民衆の信仰を促せるに非ずや、孰れかこれ佛教の範疇を出でたるものぞ。

徳川時代に於ける漢學は、一代文化の指導者なりき。一般民

藤原惺窩

名は庸、惺窩は號、和漢の學に通ず、元和五年(三二七)歿、年五十九。

東山時代

足利義政より足利氏滅亡までの百三十年間(一四一三—一五三三)

桃山時代

足利氏滅亡より豊臣氏滅亡までの約四十年間(一五七三—一六〇三)

朱子學

支那宋時代の大儒朱子の學說を祖述せる經學。

衆の佛教に對する崇敬の念は、全く地に墮ちざりしと雖も、僧侶が暖衣飽食に甘んずるに至りしと共に、儒學の勢力は反比例して、漸く人心を收攬し、藤原惺窩以下の儒者出て、こゝに佛教を壓倒せり。この趨勢は、繪畫に就いて見るも、また明らかにして、東山時代にありては、山水の外、寒山拾得、達磨など、わけても禪宗に關するもの多かりしが、桃山時代に於ては、既に文王、武王、二十四孝等の圖像、さては、耕織圖など、盛に出て來て、夙に變遷の運を示しぬ。

我が國に於ける漢學、佛教の消長を思ふに、漢學先づ傳はり、佛教後に傳はりしと雖も、前者は常に後者に壓せられ、未だ曾て分離して勢力を爲すに至らざりき。朱子學の如きも、鎌倉時代に於て五山の間、胚胎しながら、その頭角を表し來れるは、遙に後世にあり。今や時勢遷りて、兩者の地位は顛倒し、昔は僧侶儒學

度會延佳

伊勢外宮の神官、元祿三年(三三〇)歿、年七十六。

伊勢神道

度會神道ともいひ、度會延佳の主張した神道。

山崎闇齋

名は嘉、京都の人、儒者、天和二年(三四三)歿、年六十五。

祇園南海

初の名は正郷、後、瑜と改む、紀州の人、詩人、寶曆元年(三四二)歿、年七十五。

服部南郭

名は元喬、京都の人、儒者、寶曆九年(三四七)歿、年七十七。

曲亭馬琴

姓は瀧澤、名は解、曲亭は號、江戸の人、小説家、嘉永元年(三五〇)歿、年八十二。

を兼ねたるに、こゝに至りて純粹の儒學者を生ぜり。徳川家康天下を経綸し、儒教を以て人心の歸嚮する所を定めんとす。趨勢固より察知すべし。かくて、儒教の盛運につれて、從來佛教的解釋を附し來りし神道に對しても、儒教的解釋を施すに至れり。度會延佳の伊勢神道が周易の理を含めしが如き、山崎闇齋が垂加神道を起して、朱子の學說を敷衍せしが如き、即ちこれなり。此の如きは、江戸時代前半期の狀勢なるが、後半期に至りては、詩文の學、一時に盛にして、祇園南海、服部南郭等の文人墨客輩出し、詩を賦し、畫を作り、悠々自適、昇平の春を樂しめり。されど漢學の倫理的方面も、閑却せられたるに非ず。曲亭馬琴の描出せる人物が、何れも儒教の精神を具體化する傀儡の如く、情念を抑へて、意志を重んずることは、正に元祿に於ける小説中の人物と好個の對照をなせるものといふべし。蓋し從來の典型を打破

常套手段

して、自由精神の發露を期せる元祿期の平民文學は、潑刺たる生氣、自ら何物にも捉へられざる點ありしなり。しかも小説が勸善懲惡を標榜せるは、一日の事にあらず。教訓的口吻を以て節章を始むる常套手段は、元祿期に於ても既に屢見する所なり。而して此等の思想は、明治も稍進める頃まで遂に打破せらるゝに至らざりしなり。

更に轉じて、武士道に就きて述ぶる所あらんか。武士道や、之を廣義に解すれば、開闢以來日本民族の血管に漲れる國民精神なり。而も之が、儒佛二教によりて、その發達を助長せられしは、争ふべからざる事實にして、いはば根柢を國民精神に置き、外來思想によりて之を訓練せるものなり。萬葉集中の防人の歌に、

防人の歌
萬葉集卷二十

大君のみことかしこみいそにふり
うなばらわたる父母をおきて

しこの御楯

稱徳天皇
第四十八代

今日よりはかへりみなくて大君の
しこの御楯といでたつわれは

とあるが如き、また稱徳天皇が關東人の忠勇を愛でたまひ、劍を賜うて特に朝廷の護衛とせられし時、

是ノ東人ハ常ニ曰ク、額ニハ箭ハ立ツトモ背ハ箭ハ立タジト云ヒテ、君ヲ一心モチテ護ル物ゾ。此ノ心知リテ汝仕ヘト救リタマヒシ御命ヲ忘レズ、此ノ狀悟リテ諸々東國ノ人等謹シマリ仕ヘマツレ。

といふ宣命を下したまひしが如き、皆、熱烈なる武士道精神の發露せるものと謂ふべきなり。かくて世と共に鍛はれ來り、鍊られ來れる武士道は、遂にその要綱として、忠誠、武勇、名節、禮儀、清廉、潔白、練膽、制慾、勤儉、質素等を重んじたるが、此等の主義の漸く體を具へ來りし經路は、また文學の上に於てこれを窺ふを得べ

曾我物語
著者不明、曾我兄弟の復讐の事柄を記した物語。

義經記
著者不明、源義經の史傳を脚色した小説。

享保

中御門天皇の御宇、將軍吉宗の時代、(三三六—三三五)。

荷田春滿

姓は羽倉氏、國學者、元文元年(三三〇)歿、年六十九。

賀茂真淵

通稱岡部衛士、遠江の人、國學者、明和六年(三四〇)歿、年七十三。

本居宣長

號は鈴の屋、伊勢松阪の人、國學者、享和元年(三四二)歿、年七十二。

平田篤胤

秋田の人、國學者、天保十四年(三三三)歿、年六十八。

淋漓

尾形光琳

名は惟富、京都の人、畫家、享保元年(三三〇)歿、年五十九。

圓山應舉

丹波の人、畫家、圓山派の祖、寛政七年(三四五)歿、年六十三。

田中訥言

尾張の人、畫家、文政六年(三四八)歿。

宇喜多一蕙

京都の人、土佐派の畫人、安政六年(三五〇)歿、年六十五。

岡田爲恭

畫家、文久三年(三三三)歿。

菊池容齋

名は武保、畫家、明治十一年歿、年九十一。

元弘

後醍醐天皇の年號、(九二—一九三)。

建武

後醍醐天皇の年號、(九四—一九五)。

し。試みに平家物語と太平記とを比較するも、思ひ半ばに過ぐるものあらん。

徳川時代は、中古に於て涵養せられたる尙武の氣象の最高潮に達せる時期にして、曾我物語、義經記等の勇壯剛毅なるものが喜ばれしも、決して偶然にあらず。さはれ、その根本精神は、國民固有の思想にして、儒教も佛教も、單に之に形式を與へたるに過ぎざるなり。忠孝の精神は、古よりあり、儒教はこれに名義を與へしなり。佛教が武士の思想を感化する所ありしは、主として禪宗による。座禪の極致は、劍道、柔術の極意と同じきものあるに非ずや。とにかくに、國民本來の特性と外國傳來の思想とは、融和合一して、渾然たる美果を成すに至りしなり。

江戸時代に於ける武士道的思想此の如く、更に享保以後に至りては、鬱勃として抑ふべからざる復古主義の興り來れるあり。

これ文學藝術が因襲久しきをなして、極端なる不自然に陥り、虚偽を事として則るべきものなきに慨し、古代の自然に復すべく唱道せられたる革新の叫びに他ならざりしなり。而してその風潮は、先づ學問に萌し、尋いで、文學、美術、風俗の上に現れたり。國學に於ては、荷田春滿、賀茂真淵、本居宣長の如き、皆古道を闡明してこれを宣揚したるものにして、平田篤胤は更に一步を進めて、實際社會にそを行はんとせり。畫界にしては、前に生氣淋漓たる尾形光琳出で、後に寫生の妙技を發せる圓山應舉出でしが、復古思想の盛なるに伴なひては、田中訥言、宇喜多一蕙、岡田爲恭等の古土佐を模するあり、菊池容齋の題材を元弘、建武の頃に探りて、勤王思想を鼓吹せんとするあり。明治維新の鴻業も期する所、正にこの復古にありしなり。復古成りてこゝに五十餘年、今や我が國は東西思想の交會點にあり。

(東園遺稿に據る)

高山樗牛
名は林次郎、山形縣
の人、文學博士、文
藝批評家、明治三十
五年歿、年三十四。

三 吾人は須らく現代を超越せざるべからず

高山 樗牛

吾人は想ふ、平和は餘りに長く此の世に續きたり。斯くて人
はこの平和の世の長きに慣れて、餘りに平氣になり過ぎたるに
あらざるか。

怪しむを要せざるなり。鮑魚の市に入るもの、久しうして其
の臭きを忘るゝが如く、彼等は凡ての物に對して驚きの心を喪
へりと覺ばし。憂ひあれども憂へず、悲しみあれども悲しまず。
疑ふべきに安んじ、惑ふべきに住まる。文明の苦痛は此の世の
上下に充ち満つれども、彼等は恬として省みず。たゞ、名聞
利養の外に、世間又疑惑なるものの存するを解せざるもの如
し。嗚呼人は何時まで自ら欺かざるべからざるか。

鮑魚の市

恬として恥ぢず
名聞利養

欺かざるべから
ざるか

戒 飭
阿 從

高山 樗牛 筆

吾人は須らく現代を
超越せざるべからず
高山林次郎

桎 梏

吾人は須らく現代を
超越せざるべからず

高山林次郎

高山樗牛筆

を觀察せざるべからず。

嗚呼小兒の心か。玲瓏玉の如く、透徹水の如く、名聞を求めず、
利養を願はず、形式方便習慣に充ちみてる一切現世の桎梏を離

藐然

大方

れ、あらゆる人爲の繫縛に累はされず、たゞく本然の至性を披いて天眞の流露に任ずるもの、嗚呼、獨り夫れ小兒の心か。

吾人素と學無く才無し。唯野性の生まれながらにして移し難きものあるのみ。年來人に離れ、世と絶し、藐然として天地の間に嘯く。潛に想ふ、この心、或は小兒の心に遯ひそからむか。願はくは依つて以て聊か平生の疑惑を陳べ、録して大方の教を請はむか。

人の生を求むるは此の生に價値を認むればなり。即ち知る、人生は畢竟價値に外ならざるを。

人生既に價値なり。是を以て人生の歸趨は常に最大の價値を相伴なふ。最大の價値の存する所、即ちこの價値の所有者にとりて、人生の全意義の包括せらるゝ所なり。至上の幸福茲に在り、最高の道義亦茲にあり。絶對なり、無上なり。苟も自我の

存在する限り、天上天下無二無三の尊貴なり。人は是がための故に執著し、欲求し、煩悶し、戰鬥す。時として繼ぐに死を以てして悔いざるなり。豈營に悔いざるのみならむや、彼はかくの如くにして其の生存の意義を全うし得たるを喜ぶなり。

看來れば事體極めて簡明なるに非ずや。吾人は生く、生くるは價値の爲なり。即ち最大の價値と共に生き又死するは、理の當然にして事の必至なり。かくの如くにして吾人はこの世に生死する能はざるか。

人生の價値なるは既に之を了す。而して記せよ、價値は之を有する者のみの價値なり。能持の主體を離れて、世間又價値なるものの存せざること、猶眼を去りて色なく、耳を外にして音無きが如し。即ち價値の物たる主觀的なり。

吾に主観的なるのみに非ざるなり。 價値は畢竟個性の反應に外ならざるを以て、同一事物は必ずしも凡ての人に對して同一價値を有すること能はず、即ち價値は主観的なると共に個人的なり。

既に個人的なり、是を以て價値の物たる、學ぶべからず、受くべからず。 辯以て強ひ難く、力以て傳へ難く、言語理解を超越して、人々自ら自得するの外無きのみ。 換言すれば、價値は自ら創造し得るものにして、初めて其の所有者たり得べきのみ。

人生既に價値なり。 而して價値の主観的にして個人的なる、亦既にかくの如し。 畢竟生を此の世に享けて、茲に自ら人生の價値を造り、其の價値の最も大いなるものに隨つて安住の地を求めむと欲す。 人生の意義又盡くせりといふべし。

(櫻牛全集)

四 雅 文 抄

一 知足庵の記

ならばしこそは
……あなれ
心ゆく

誰かは……べき

林にやどる鷓鴣云

鷓鴣深林ニ集ケヘド
モ一枝ニ過ギズ、
鼠河ニ飲メドモ滿腹
ニ過ギズ、(莊子逍遙
遊)

あはれ、世のならばしこそはかなき物はある。 高き賤しき品いと異なりといへども、おのがじし心ゆくばかりなるは稀にて、唯足らぬ事のみぞ多かりける。 花を思ふとは、梢の嵐をうらみ、月をめぐるとしては、尾上の雲をいとふためし、誰かはのるべき。 「林にやどる鷓鴣は、僅かなる小枝の影をのみたのみ、流に水求むる鼠は、たゞ腹にみたすに過ぎず。」 とこそ古人もいひつれ。 かゝることわりをだに分たば、限あるこの世に、限なきことを思ふべきかは。

茲に中村のぬしなむ、能く塵の世のけがしきをのがれて、萱の

梅尾の昔を云々
建久二年(八五)僧榮
西が宋から持ち歸つ
た茶の實を山城國梅
尾の明恵上人が深瀬
の園に植ゑた、これ
が我が國の茶のはじ
まりであるといふ。

古人云々

足ルヲ知ル者ハ富メ
リ。(老子第三十三

ことわりにこそか
なはめ

あげつらふ

琴後集

十五卷、村田春海の

歌文集

村田春海(江戸の人

國學者、眞淵の門人

文化八年(三三)歿、
年六十六。

軒、松の樞こしらへに心の月をすましめ、花をつむ夕、闕あか伽かをくむ曉御佛に
つかふる暇ある時は、氷をくだき雪を煮て、梅尾うめのおしの昔をしのぶめ
るわざにしも、心をなむ慰めける。これやこの世に求むべきす
ぢをも忘れ、又人を羨むべきふしをも思はで、己が心から事足る
わざにしもあれば、彼の古人のいひけむことわりにこそかなは
め。いでや、うつせみの世の限なき求ある際きはとは、日を並べてあ
げつらふべくもあらざりけり。うべなるかな、この住家をしも
足ることを知るとは名づけしこと。

(琴後集)

二漁村

海人あまの住家ばかりあはれなるものはなし。いとたよりなき
海邊の風もたまらぬ松蔭などに、唯かりそめに造りたる藁屋ど

手がらみ
まぼる

舵ひき折る

くどつ

ものさま、波うちよせなば、やがて流れもうせぬべう、いとほかな
げに見ゆるを、繪に書きすさびたるなどは、なかくにをかしき
ものから、さて住みなば、何心地かせましと、思ひやるだに心細し。
夕つ方など、年老いたるをのこの手がらみしたるが、磯邊に立
ちて、今日はいと遅くもあるかな。などいひつ、沖つ方をまぼ
りをり。うまごどもにやあらむ、眞砂の上を走りありきつ、遊
び居たるに、入日さしたる島蔭より、三つ二つ歸り來る舟の、舵ひ
き折りてほこらしげなるを、老人待ち得顔にうちほ、ゑみたる
は、さち多かりしにやと見ゆ。渚によせて飛び下るま、に、綱繰
り寄せなど、とかくしつ、の、しるに、男も女も數多出て來て、大
きなる籠に魚ども取り入れつ、擔ひもて行くさまは、さはいへ
ど賑はしげなり。くどつめく物もて來て、小さき魚三つ四つ乞
ひもて行く童などもあり。すべて人多く立ち込み騒ぎて、舟の

なりはひ

樞園文集

三卷、中島廣足の隨筆集。中島廣足、肥後の人、國學者、元治元年(三二)歿、年七十三。

あたりかしがましく、さし寄りて覗くべくもあらず。いと長き網の渚にかけ干したるを、繰りためて取り入れなど、やうく静まりゆけば、此方彼方、火ともしたる透影壁もあらはにて、いとあはれに見ゆ。

一夜宿りて見れば、浪風の響枕をゆすりて露まどろまれず。曉方隣の家々目覺まして、なりはひの事どもなるべし、あやしう聞き知らぬ事どもを、おのがじし聲高にいひかはしたる、げに海人のさへづり、珍らしうもをかしうも。

(樞園文集)

三 擣衣を聞く

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむも又しきる。雁がねの聲の擣衣をさそふにやあらん、擣衣の

音の雁がねにかよふにやあらん。あなあやしく。そもこの音の悲しきか、住む里のさびしきか、擣つをりのうきゆるか、皆あらず、聞く者の心のわびしきなり。

(泊酒舎集)

四 漁父辭

秋吹く風に耳欬てて、故郷の鱸のなます思ひ出でけん人こそ、げにさる事とは覺ゆれ。岸の額に老の浪をたゝみて、直なる針に王公の位釣り得し翁はうらやましくもあらずや。我はたゞ世を捨舟に棹さして、山蔭のしづけく、水草の清からんあたりに、息の緒のかぎり心を遣りて、うへなき楽しみとはなしぬべきぞかし。

(泊酒舎集)

鱸のなます思ひ出でけん人

支那吳の人張翰、晉に仕へ、故郷の鱸を思ひ出し致仕して歸つた故事。

人こそ、覺ゆれ、王公の位を釣り得し翁

太公望呂尚を指す。息の緒のかぎり

泊酒舎集
九卷、清水濱臣の歌文集。清水濱臣、通稱は玄長、江戸の醫師、村田春海の門人、文政七年(二四)歿、年四十九。

五併文抄

去來

向井氏 肥前の俳人
寶永元年三冥忌歿年
五十四

落柿舎

去來の別荘

王祥云々

丹奈有り實ヲ結ブ、
母命ジテ之ヲ守ラシ
ム、風雨毎に祥輒チ
樹ヲ抱イテ泣ク、其
ノ篤孝純至此ノ如シ
(晋書王祥傳)

天の帝云々

第三十八代天智天皇
農民の辛苦をおぼし
めされた

いどみのしる

一 落柿舎の記

去

來

嗟哦に一つのふるや侍る。そのほとりに柿の木四十本あり。五とせ六とせを経ぬれど、このみも持ち來らず、代がふるわざもきかねば、もし雨風に落されなば、王祥が志にもはぢよ。もし鳶鳥にとられなば、天の帝のめぐみにももれなむと、屋敷もる人を常はいどみのしりけり。

ことし八月の末、かしこにいたりぬ。折ふしみやこより、商人來り、立木にかひ求めむと、一貫文さし出し悦びかへりぬ。予は猶そこにとままりけるに、ころくと屋根はしる音、ひしくと庭につぶるゝ聲、よすがら落ちもやまず。明くれば商人の見舞

むかふ髪

かへしくれたびて、
んや

素堂

本名山口信章、甲斐
の人、俳人、享保元
年(三三)歿、年七十
五

ちよよ

風の音きゝ知りて、
八月ばかりになれば、
ちよよとほかな
げになく、いみじう
あはれなり。(枕草子)

鬼の子云々

糞虫いとあはれなり、
鬼のうみければ、親
に似てこれもおそろ
しき心あらむとて云
云。(枕草子)

瞽叟

舜の父、頑で舜をに
くんだ。舜は支那昔
の聖王。

ひ來たり、梢つくくと打眺め、我むかふ髪のところより、白髪生ふるまで、この事を業とし侍れど、かくばかり落ちぬる柿を見ず。きのふの價かへしくれたびてんや」とわぶ。いと便なれば、許しやりぬ。この者のかへりに、友どちの許へ消息送るとて、みづから落柿舎の去來と書きはじめけり。

柿ぬしや木ずるはちかきあらし山

(風俗文選)

二 糞蟲説

素堂

みのむし、聲のおぼつかなきをあはれぶ。ちよよちよよとなくは、孝に專なるものか。いかに傳へて鬼の子なるらん。清女が筆のさがなしや。よし鬼なりとも瞽叟を父として舜あり、汝は蟲の舜ならんか。みのむし、聲のおぼつかなくて、かつ無能なるをあはれ

ぶ。松蟲は聲の美なるが爲に、籠中に花野をなき、桑子は絲を吐くにより、からうじて賤の手に死す。

みのむし、無能にして靜なるをあはれぶ。胡蝶は花にいそがしく、蜂は蜜をいとむにより、往來おだやかならず、誰がためにこれをあまくするや。

(風俗文選)

三百 蟲 譜

横井也有

蝶の花に飛びかひたる、やさしき物の限りなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠にくるしむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ、莊周が夢もこの物には託しけめ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺ましたれば、この物の事、更にも誇り難し。蟬はた

風俗文選
俳文集、森川許六の撰
森川許六、芭蕉の門人、正徳五年(三三三)歿、年六十。

横井也有

名は時般、尾張藩士、俳作家、天明三年(三四三)歿、年八十二。

さてこそ、けめ

莊周が夢

莊周が夢に胡蝶になつたことは其の著莊子に出てゐる。

古今の序に……

花になく、鶯、水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける。

古池に

古池や蛙とび込む水の音(芭蕉)

翁

松尾芭蕉

やがて死ぬ

やがて死ぬけしきは見えず、蟬の聲(芭蕉)

すだく

貧の學者

管の車胤は家が貧しかったので、夏には練絹の袋に螢を入れ、其の光に照らして書を讀んだ(管書、車胤傳)

だ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。や、日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば、初蝶とも初蛙ともいふ事をきかず。この者ばかり初蟬といはる、こそ大きな手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず」と、このものの上は翁の一句に盡きたりといふべし。

螢は比ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇はたゞこの者の爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに、貧の學者にとられて、油火の代りにせられたるは、この者の本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃ならむ。つく、ぼふしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死してこのものになりた

蜀魂 蜀の望帝の魂魄が化してこの鳥になつたといふ傳説がある。

退隱の媒

楚の麋舎は蜘蛛の巢に蟲がかゝつて死ぬのを見て無常を觀じ、官をやめて退隱した。(金樓子)

りと、世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにもおとるべからず。

蜘蛛はたくみに網を結んで、ひそまつて物を害せむとす。もろこしのむかしには、退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていとにくし。古代朝敵の初めとして、頼光をさへおびやかしたるいとおそろし。さはいへ、廢宅の荒れたる軒に、蟬の羽などかけ捨てたるは、いさゝかあはれ添ふる折もあらむか。彼はかひなくしく巢作りてこそあれ、東海道にちりぼひたる宿なし者をば、くもとはいかていふやらむ。

蠶の生涯は世のために終り、火取蟲はたがために身をこがすや。蜉蝣ははかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は不物ずきの謗となれり。おなじ寶の名によばれて、玉蟲はやさしく、こがね蟲はいやし。

槐安の都

淳于夢に大槐安國の郡守となつた。夢がさめて古槐の下を尋ねて見ると、大きな蟻の穴があつた。それが槐安國であつた。(異聞集)

千丈の隄

千丈ノ隄モ蟻ノ穴ヨリ潰ユ。(韓非子)

歐陽氏

文は憎_ミ若_ク蠅 賦に出づ。

長嘯子

木下勝俊の號、文は紙魚を憐むの詞に出づ。

蟻 螂

蟻螂ノ斧ヲ以テ隆車ノ隄ヲ築ガント欲ス。(文選) いかつ

蟻は明暮にいそがしく、世の營に隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事を得む。さるもたよりあしきかたに穴を營みて、千丈の隄を崩すべからず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。狗の齒に噛まる、蚤はたま〜にして、猿の手にさぐらる、虱は逃る、こと難かるべし。

蝸牛は、只水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらむ。家はもちたれども、行く先々をおひ歩くは、水雲の安きにも似ず。蛇、蚯蚓の足なくても歩むべくば、蜈蚣をさむしの數多きは不用のことなり。

蟻螂の瘦せたるも、斧を持ちたる誇よりその心いかつなり。人の上にもこのたぐひはあるべし。

原 駿河國駿東郡。
吉原 同國富士郡。

附けたるならむ

七賢 支那晉の嵇康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎等七人、竹林に隠れて清談に耽つた。
鶉衣 十四卷、横井也有の俳文集。

四月二十日 仲恭天皇の承久三年(二八二)。
帝 第八十四代順徳天皇。
春宮 第八十五代仲恭天皇御兄の院。
第八十三代土御門天皇。
父みかど 第八十二代後鳥羽天皇。
本院とぞ聞えさす。
家實 近衛基通の子、仁治三年(二九三)歿、年六十。
道家 後京極良經の子、寛元三年(二九五)歿、年六十。
あづまの若君 當時の鎌倉將軍、頼經、康元年(二二五)歿、年三十九。
心づかひすべいかめ 御勘じ

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。たゞ原吉原を駕にのりて、富士を眺めゆく人には似たり。促織・鈴蟲・轡蟲は、その音の似たるを以て名によぼる。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附けたるならむ。毛生ひむくつけき蟲にもおなじ名ありて、松を枯らし、人にうとまる。一つ在處に二人の八兵衛ありて、一人は後生をねがひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕べ、始めてほのかに聞きたらむ、又は長月の頃、力なく残りたるは寂しきかたもあり。蚊帳釣りたる家のさま、蚊遣焚く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙なかりけむ。

(鶉衣)

六 新 島 守

四月二十日、帝おりさせ給ひ、春宮四つにならせ給ふに譲り申させ給ふ。近ごろ皆この御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならむかし。同じき二十三日、院號の定めありて、今おりさせ給へるを新院と聞ゆれば、御兄の院をば中院と申し、父みかどをば本院とぞ聞えさす。このほどは家實のおとゞ關白にておはしつれど、御讓位の時、左大臣道家のおとゞ攝政になり給ふ。かのあづまの若君の御父なり。さても院のおぼし構ふること、忍ぶとすれどやうくもれ聞えて、ひがしまにもその心づかひすべいかめり。あづまの代官にて伊賀の判官光季といふものあり。かつくかれを御勘じのよし仰せらるれば、身方に參るつは者ども押寄せたるに遁る

時にこそあなれ

かつは

時房

北條時房、義時の弟
仁治元年(一一九〇)歿、年
六十六

泰時

北條泰時、義時の長
子、仁治三年(一一九三)歿、
年六十

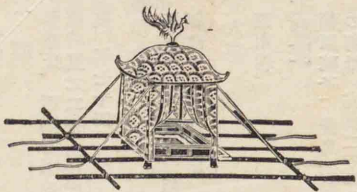
義時

北條義時、時政の子、
元仁元年(一一八四)歿、
年六十二

うしろめたし

べきやうなくて腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院はお
ぼしめしける。
あづまにもいみじうあわてさわぐ。さるべくて身の失すべ
き時にこそあなれと思ふものから、討手の攻めきたりなむ時に、
はかなきさまにて屍を曝さじ。おほやけと聞ゆとも、みづから
したまふことならねば、かつはわが身の宿世をも見るばかりと
思ひなりて、弟の時房と、泰時といふ一男と、二人を頭として、雲霞
の兵をたなびかせて都にのぼす。泰時を前に据ゑていふやう、
「おのれをこのたび都にまゐらすことは思ふところ多し。本
意の如く清き死にをすべし。人にうしろ見えなむには、親の顔
また見るべからず。今をかざりと思へ。賤しけれども義時君
の御爲にうしろめたき心やはある。されば横ざまの死にをせ
むことはあるべからず。心をたけくおもへ。おのれうち勝つ

心を得
鳳輦



参りあへらば

ものならば、ふたゝびこの足柄箱根山は越ゆべし。」など泣く泣
くいひきかす。「まことにしかなり。又親の顔をがまむことも
いとあやふし。」とおもひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに
今やかざりとあはれに心細げなり。
かくてうち出でてぬるまたの日、おもひかけぬほどに、泰時たゞ
ひとり鞭をあげてはせ來たり。父胸うち騒ぎて、「いかに。」と問
ふに、「軍のあるべきやう、大かたのおきてなどは、仰せの如くその
心を得侍りぬ。もし道のほとりにも、はからざるに、かたじけな
く鳳輦を先立てて御旗をあげられ、臨幸の嚴重なることも侍ら
むに参りあへらば、その時の進退いかゞ侍るべからむ。この一
ことを尋ね申さむとてひとり馳せ侍りき。」といふ。泰時とば
かりうち案じて、「かしこくも問へるをのこかな。その事なり。
まさに君の御輿に向ひて、弓を引くことはいかゞあらむ。さば

かしこまり

かりの時は兜を脱ぎ、弓の弦を切りて、ひとへにかしこまりを申して、身を委せ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましなから、軍兵をたまはせば、命を捨てて、千人が一人になるまでも戦ふべし。」といひも果てぬに、いそぎ立ちにけり。

都にもおぼしまうけつる事なれば、ものゝふども召しつどへ、宇治勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用意、心ことなり。公經の大將ひとりのみなむ、御うまごのこともさる事にて、北の方一條中納言能保といふ人のむすめなり。その母北の方は故大將のはらからなれば、二方ならずあづまを重くおぼして、さしいらへもせず、院の御心の軽き事とあぶながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信、尾張中將清經、中御門大納言宗家、又修明門院の御はらからの甲斐宰相中將範茂など、つぎつぎあまたきこゆれど、さのみは記しがたし。いくさにまじり立

公經

藤原氏、西園寺家の祖、寛元二年(一九〇)歿、年七十四。

御うまご

將軍頼經を言ふ、頼經は公經の女の出

故大將

源頼朝

七條院

藤原殖子、後鳥羽院の御母、安貞二年(一一八八)歿、年七十二。

修明門院

藤原重子、順徳院の御母、文永元年(一一三二)歿、年八十三。

給はざめり

富士川

甲斐國に發して駿河灣に入る。

天龍川

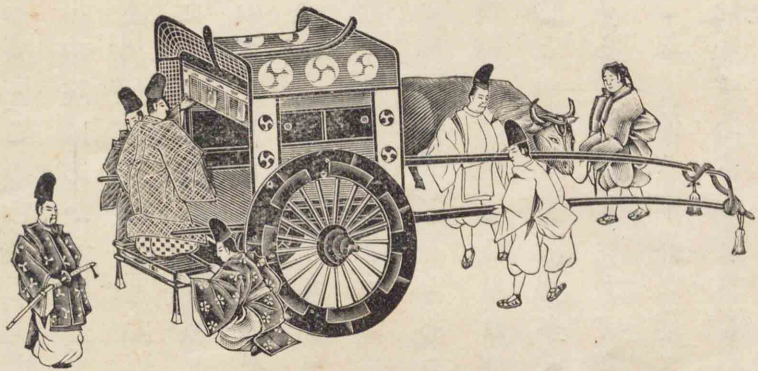
諏訪湖から出て遠江國を流れて海に入る。

えもいはず

つ人々、このほかの上達部にも殿上人にもあまたありき。

中院はあかて位をすべり給ひしより、言にいでてこそ物したまはねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの御さわぎにも、殊にまじらひ給はざめり。新院はおなじ御心にて、よろづいくさの事なども掟ておほせられけり。

いつの年よりも五月雨はれ間なくて、富士川・天龍などえもいはず漲りさわぎで、いかなる龍馬もうちわたしがたければ、攻めのぼる武者どももあやしくなやめり。かゝれども遂に都にちかづくよしきこゆれば、君の御武者も出で立つ。その勢六萬餘騎とかや。宇治勢多へ分ちつかはす。世の中ひゞきのゝしるさま言の葉もおよばず、まねびがたし。あるはふかき山へ逃げこもり、遠き世界に落ちくだり、すべてやすげなく騒ぎ満ちたり。いかゞあらむと君も心みだれておぼしまどふ。かねてはたけ



網代車

く見えし人々も、誠のきはになりぬればいと心あわたゞしく色を失ひたるさまどもたのもしげなし。

六月二十日あまりにや、いくばくの戦だになくて、つひに身方のいくさやぶれぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、言はむ方なくあきれて、上下たゞ物にぞあたりまどふ。あづまよりいひおこするまゝに、かふたりの大將軍はからひおきてつづ、保元のためしにや、院の上、都の外に遷したてまつるべしときこゆれ

鳥羽殿

城南の離宮ともいふ、京都市伏見區下鳥羽に舊跡がある。

あやし

ものにもがなや

とりかへす物にもがなや世の中を、ありしなごらのわが身と思はむ。(源氏物語河海抄)

いみじう……うらめし

ば、女院宮々所々におぼしまどふ事さらなり。

本院は隱岐の國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ、網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日をかぎりの御ありき、あさましうあはれなり。「ものにもがなや」とおぼさるもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御とし四そぢに一つ二つやあまらせ給ふらむ。まだいとをしかるべき御ほどなり。信實朝臣召して御すがたうつしか、せらる。七條院にたてまつらせ給はむとなり。かくて同じき十三日に、御舟にたてまつりて、遙なる波路をしのぎおはします御心ち、この世の同じ御身ともおぼされず。いみじういかなりける代々の報にかとうらめし。

新院も佐渡國にうつらせ給ふ。上達部殿上人それより下はた残りなく、このことに觸れにしたぐひは重く軽く罪に當る様

いみじげなり。中院は初めよりしろしめさぬことなれば、あづまにもとがめ申さねど、父の院遙に移らせたまひぬるに、のどかにて都にあらむこととおそれありとおぼされて、御心もて、その年閏十月十日土佐國畑といふ所に渡らせ給ひぬ。

六つにて位につきたまひて、十四年おはしましき。おりたまひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下はおなじ事なりしかば、すべて三十六年がほどこの國のあるじとして、萬機のまつりごとを御心ひとつにをさめ、百の官をしたがへたまへりしそのほど、吹く風の草木をなびかすよりもまされる御ありさまにて、遠きをあはれみ近きをなでたまふ御めぐみ、雨の脚よりもしげければ津の國のこやのひまなき政をきこしめすにも、難波の葦のみだれざらむことを思しき。菟姑射の山の峰の松もやうく、枝をつらねて、千代に八千代をかさね、霞のほらの御住

土佐院

第八十三代土御門天皇、建久九年(八五〇)御受禪、承元四年(二七〇)御讓位。

佐渡院

第八十四代順徳天皇、承元四年(二七〇)御受禪、承久三年(二八二)御讓位。

津の國の

津の國のこやとも人をいふべきに、隙こそなけれ、蘆の八重葦、和泉式部(後拾遺集)

おはしましぬべかりける世ありて

居、幾春をへても空ゆく月日のかぎり知らず、のどけくおはしましぬべかりける世をありてよしなき一ふしに、今はかく花の都をさへ立ちわかれ、おのがちりぐにさすらへ、磯の苫屋に軒をならべて、おのづからこととふものとは、浦に釣するあま小舟、鹽やく煙のなびくかたをも、わがふる郷のしるべかとばかり、ながめすごさせたまふ御すまひどもは、それまでと月日をかぎりたらむだに、あす知らぬ世のうしろめたさにいと心ぼそかるべし。まいていつをはてとかめぐりあふべきかぎりだになく、雲の浪けぶりの浪のいく重とも知らぬ境に、世をすぐしたまふべき御さまども、口惜しといふもおろかなり。

このおはしますところは、人はなれ、里とほき島の中なり。海づらよりはすこしひき入りて、山かげにかたそへて、大きやかなるいはほのそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、

ことぞぐ
柴の庵

いづくにも住まれず
ばたいたすまであらむ
柴の庵のしばしなる
世に。西行法師(新
古今集)

ゆゑづく

水無瀬殿
本院の造り給うた殿、
攝津國三島郡島本村
大字廣瀬にあつた。

二千里の外

三五夜中新月ノ色、二
千里外故人ノ心。(朗
詠集)

増鏡

十卷、著者不明。
後鳥羽天皇から後醍
醐天皇までの事蹟を
假名文で記した歴史
物語

けしきばかりことぞぎたり。まことに柴のいほりのたゞしば
しと、かりそめに見えたる御やどりなれど、さるかたになまめか
しく、ゆゑづきてしなさせ給へり。水無瀬殿おぼし出づるも夢
のやうになむ。はるく、と見やらるゝ海の眺望、二千里の外も
のこりなき心ちする、今さらめきたり。しほかぜのいとこちた
く吹きくるをきこしめして、

われこそは新島もりよおきの海の

あらしなみ風こゝろして吹け

同じ世にまたすみのえの月や見む

けふこそよそにおきの島守

(増鏡「新島守」)

法皇

後白河法皇、建久三
年(一一五三)崩御。

建禮門院

名は徳子、平清盛の
次女、高倉天皇の中
宮、安徳天皇の御母。

北祭

賀茂の祭のこと。陰
曆四月中の酉の日に
行はれる。

大原

山城國愛宕郡大原村、
清原深養父

平安朝の歌人、延喜
(一一六一—一一六三)頃の人

補陀落寺

山城國愛宕郡。

皇太后宮

後冷泉天皇の皇后、
關白藤原教通の女、
御名歡子。

名残ぞ……るゝ

七 大原御幸

法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御住居御
覽ぜまほしう思しめされけれども、衣更著彌生の程は嵐烈しう、
餘寒もいまだ盡きず、嶺の白雪消えやらで、谷のつらゝも打解け
ず。かくて春過ぎ、夏來つて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて
大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人々
には徳大寺花山院土御門以下公卿六人、殿上人八人、北面少々候
ひけり。鞍馬通の御幸なりければ、彼の清原の深養父が補陀落
寺、小野の皇太后宮の舊跡叡覽あつて、それより御輿にぞ召され
ける。遠山に懸る白雲は、散りにし花のかたみなり。青葉に見
ゆる梢には、春の名残ぞ惜しまるゝ。頃は卯月二十日餘りの事
なれば、夏草の茂みが末を分け入らせ給ふには、はじめたる御幸な



寂光院
山城國愛宕郡大原村
にある、聖徳太子の
開基。
よしあるちか

(糸を亂る
糸を亂す

れば、御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたる程も思し召し知ら
れて哀なり。
西の山の麓に一字の御堂あり、すなはち寂光院これなり。古
う造りなせる泉水、木立、よしあるさまの所なり。葺破れては霧
不斷の香を焼き、扉落ちては月常住の燈を掲ぐとも、かやうの所
をや申すべき。庭の若草しげりあひ、青柳糸を亂りつゝ、池の浮
草波に漾ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかゝれる
藤波の、うら紫に咲ける色、青葉まじりの遅櫻、初花よりも珍らし
く、岸の山吹咲き亂れ、八重立つ雲の絶間より山郭公の一聲も、君
の御幸を待ち顔なり。法皇これを叡覽あつて、かくぞ遊ばされ
ける。

池水にみぎはの櫻ちりしきて

波の花こそさかりなりけれ

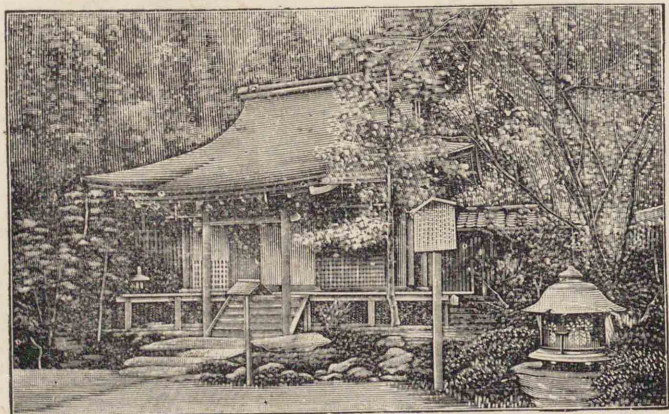
緑蘿の垣
翠黛の山

瓢箪屢、
空シ草顔淵
ガ巷ニ滋シ、藜藿深
ク鎖セリ、雨原憲ガ
樞ヲ濕ス。(朗詠集)



藜藿

ふりにける岩の絶間より落ち
来る水の音さへ、ゆるびよしある
所なり。緑蘿の垣、翠黛の山、繪に
かくとも筆も及び難し。さて女
院の御庵室を叡覽あるに、軒には
葛薺あまがほ這ひかゝり、しのぶ交りの忘
草、瓢箪屢、空し、草顔淵が巷に滋く、
藜藿深く鎖せり、雨、原憲が樞を濕
すともいひつべし。杉のふき目
もまばらにて、時雨も霜もおく露
も、洩る月影にあらそひて、たまる
べしとも見えざりけり。後は山
前は野邊、いさゝ小笹に風さわぎ、



堂本院光寂

ませ垣
まさ木のかづら



青つゞらくる人
青つゞら



いたはしうこそ
五戒・十善

世にたゞぬ身のならひとて、うきふし繁き竹柱都の方の言傳は、
間遠に結へるませ垣や、わづかに言とふものとは、峰に木傳ふ
猿の聲、賤がつま木の斧の音、これらが音づれならでは、まさ木の
かづら青つゞらくる人稀なる所なり。
法皇「人やある、人やある。」と召されけれども、御應へ申す者も
なし。

稍あつて、老い衰へたる尼一人参りたり。「女院は何處へ御幸
なりぬるぞ。」と仰せければ、「此の上の山へ花摘みに入らせ給ひ
て候。」と申す。「さこそ世を厭ふ御習といひながら、さやうの事
に仕へ奉る人もなきにや、御いたはしうこそ。」と仰せければ、此
の尼申しけるは、「五戒十善の御果報の盡きさせ給ふによつて、今
かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行になじかは御身
ををしませ給ひ候べき。因果經には、『欲知過去因、見其現在果。欲

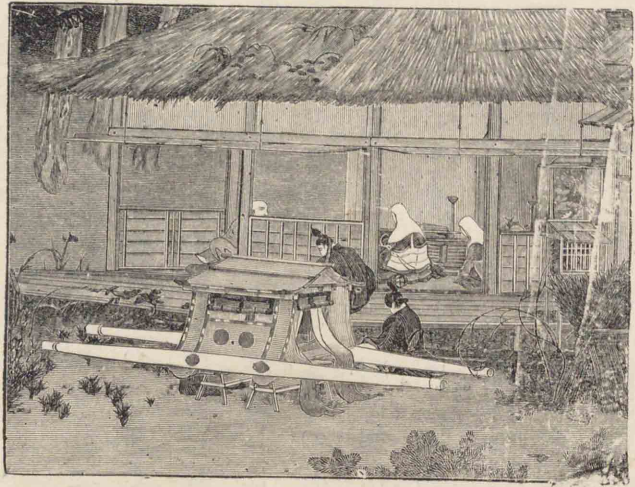
つやく

悉達太子
釋迦出家前の名、悉
達多、中印度カピラ
王國淨飯王の太子。

故少納言
藤原通憲、鳥羽・崇
徳・近衛の三朝に歴
事した。

知未來果、見其現在因。」と説かれたり。過去未來の因果をかね
て悟らせ給ひなば、つやく御歎あるべからず。むかし悉達太
子は、十九にて伽耶城を出でて、檀特山の麓にて、木の葉を連ねて
肌をかくし、峰に上つて薪を採り、谷に下つて水を掬ひ、難行苦行
の功によつて、終に成道正覺し給ひき。」とぞ申しける。此の尼
の有様を御覽ずれば、身には絹布のわきも見えぬものを結び集
めてぞ著たりける。あの有様にても、かやうの事申す不思議さ
よと思し召して、「抑、汝は如何なる者ぞ。」と仰せければ、此の尼さ
めざめと泣いて、しばしは御返事にも及ばず。やゝあつて涙を
おさへて、「申すにつけて憚り覺え候へども、故少納言入道信西が
女、阿波の内侍と申すものにて候なり。母は紀伊二位。さしも
御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけて
も、身の衰へぬる程思ひ知られて、今更せん方なうこそ候へ。」と

當てられず
内侍にこそあなれ



(下村觀山筆)

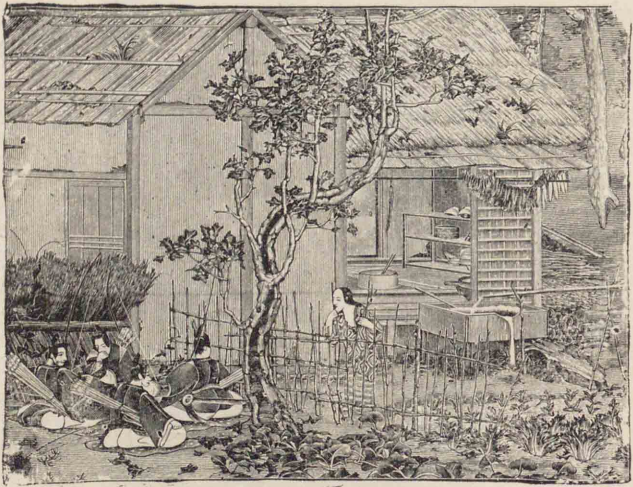
て、袖を顔に押し當てて忍びあへぬさま、目も當てられず。法皇、げにも汝は阿波の内侍にこそあなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、たゞ夢とのみこそ思し召せ。」とて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿殿上人も、不思議の事申す尼かなと思ひたれば、ことわりにて申しけりとぞ、各、感じあはれける。
さてかなたこなたを觀覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れかゝりつゝ、外面の小田も水越えて、鳴

下村觀山

本名晴之助、和歌山縣の人、日本畫家、昭和五年歿、年五十八。

先帝
安徳天皇、第八十一代。

淨名居士
維摩詰のこと、釋迦と同時代の人。



大原御幸

立つひまも見えわかず。さて女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引きあけて觀覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲をかけられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚、並びに先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝の匂にひきかへて、香の烟ぞ立ちのぼる。かの淨名居士の方丈の室内に、三萬二千の床をならべ、十方の諸佛を請じ給ひけんも、かくやとぞ覺えける。

定基
法名寂昭、長保四年
二六三入宋し、長元
七年二六四彼の地で
歿した。

障子には、諸經の要文ども色紙に書いて、ところ／＼におされたり。其の中に、大江の定基法師が、清涼山にして詠じたりけん、笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前。」とも書かれたり。少しひきかけて、女院の御歌とおぼしくて、

思ひきや深山の奥にすまひして

雲居の月をよそに見んとは

さてかたはらを窺覽あるに、御寢所と思しくて、竹の御竿に、麻の御衣、紙の御衾などかけられたり。さしも本朝漢土の妙なるたぐひ敷を盡くし、綾羅錦繡の装もさながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人もまのあたり見奉りし事ども、今の様に覺えて、皆袖をぞ絞られける。

や、あつて、上の山より、濃き墨染の衣著たりける尼二人、岩の懸路を傳ひつゝ、おり煩ひたる様なりけり。法皇、あれはいかな

る者ぞ。」と仰せければ、老尼涙を押へて、「花筐臂にかけ、岩つゝ、じ取り具して持たせ給ひて候は、女院にて渡らせ給ひ候。爪木に蕨折り添へて持たたるは、鳥飼の中納言維實が女、五條の大納言



(筆己正田岩) 花の向手

國綱の養子、先帝の御乳母、大納言の典侍の局。」と申しもあへず泣きけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、みな袖をぞ濡されける。女院は世を厭ふ御習とはいひながら、今か

闕伽

かる有様を見え参らせんずらん恥づかしさよ消えも失せばや
と思し召せどもかひぞなき。

宵々毎の闕伽の水掬ふ袂もしをるゝに、曉おきの袖の上山路
の露も繁くして、絞りやかねさせ給ひけん、山へも返らせ給はず、
又御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましゝた
る所に、内侍の尼参りつゝ、花筐をば賜はりけり。「世を厭ふ御習、
何か苦しう候べき。早々御見参あつて、還御なし参らせ候へ。」
と申されければ、女院御涙を押へて、御庵室に入らせおはします。
一念の窓の前には、攝取の光明を期し、十念の柴の樞には、聖衆の
來迎をこそ待ちつるに、思ひの外の御幸かなとて、見参ありけり。

(平家物語、大原御幸)

攝取
平家物語
十二卷、著者不詳、
別に灌頂巻と劍巻が
ある、平治物語の後
を承けて、二十餘年
興亡を記した軍記物
語。

八 若國日本

伊藤 左千夫

うちわたす八十の群山もえ出づる若き國日本年明けに
けり

佐々木 信綱

おもひなげに海月ら浮かぶ曙の春の入江の濃みどりの
波

齋藤 茂吉

にはとりの卵の黄味の亂れゆくさみだれ時のあぢきな
きかな

幾山河越え去り行かば寂しさのはてなむ國ぞ今日も旅
ゆく

若山 牧水

與謝野 晶子

磐梯の山をとゞろと鳴らし來てみづうみに入る白き横
雨

北原 白秋

寂しさに海を覗けばあはれく章魚の逃げゆく眞晝の
光

金子 薫園

大銀杏ひと葉うごかず秋雲の晴れたる下に黄なる静け
さ

太田 水穂

おほけなき力と思ふ風の吹き絶えてなほうごく槻の
木

長塚 節

張りかへむ障子も張らず來にければくらくぞあらむ母
は目よわきに

與謝野 寛

莖赤きゆづり葉うづめたわくとゆたかに降れる山の
白雪

島木 赤彦

まばらなる冬木林にかんくと響かんとする青空のい
ろ

九伊勢物語抄

都鳥



三河國八橋
三河國碧海郡、知立
町の東、遇妻川の邊
くもで
よりてなん…い
へる

一都鳥

昔男ありけり。その男身を益なきものに思ひなして、京にはをらじ、東の方にすむべき國もとめんとて行きけり。もとより友とする人、一人二人していきけり。道しれる人もなくて、惑ひ行きけり。三河國八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋を八つ渡せるによりてなん八橋とはいへる。その澤の邊の木の蔭におりゐて、餉くひけり。その澤に燕子花いと面白く咲きたり。それを見て或人の曰く「かきつばたといふ五文字を句の上にするて、旅の心を詠め」といひければ、詠める。

唐衣きつ、馴れにしつましあれば

はるく來ぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、みな人餉の上に涙落してほとびにけり。

行きく、て駿河の國に

いたりぬ。宇津の山に至

りて、我が入らんとする道

は、いと暗う細きに、葛かづ

ら生ひしげり、物心ぼそく、

すゞろなるめを見る事と

思ふに、修行者あひたり。

「かゝる道には、いかでかいまする。」といふに、見れば、みし人なり

けり。京にその人の許にとて、文かきて、つく。

駿河なるうつつの山邊のうつつにも



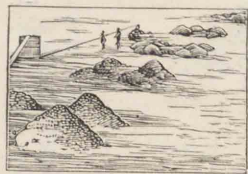
ほとぶ

宇津の山

駿河國、安倍郡と志
太郡との間

すゞろなるめ

かのこまだら
鹽尻



日も暮れなん

夢にも人に逢はぬなりけり

富士山を見れば、五月のつごもりつごもりに雪いと白う降りり。

時しらぬ山はふじの嶺いつとてか

かのこまだらかのもみだらに雪の降るらん

この山は、こゝにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらん程して、なりは鹽尻のやうになんありける。

猶行きく、て、武藏の國と下總の國とのなかに、いと大いなる河あり。それを角田川といふ。その川の邊にむれりて思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなと、わびあへるに、渡守はや舟に乗れ、日も暮れなん」といふに、乗りて渡らんとするに、皆人もものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と脚と赤き、鳴の大ききなる、水の上にあそびつゝ、魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人えしらず。渡守に問ひけ

れば、「これなん都鳥」といふを聞きて。

名にしおはばいざこと問はん都鳥

わが思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

(伊勢物語)

二 小野の雪

惟喬親王
文徳天皇の皇子、小
野宮、寛平九年(五五七)
薨、御年五十四

かゝれりけり

交野

河内國北河内郡

昔惟喬親王と申す皇子おはしましけり。山崎のあなたに水無瀬といふ所に宮ありけり。年毎の櫻の花盛には、その宮になむおはしましける。その時、右馬頭なりける人を常におはしましけり。狩はねんごろにもせで、大和歌にかゝれりけり。今狩する交野の渚の院の櫻におもしるし。その木の下におりて、枝を折りて挿頭にさして、上中下みな歌よみけり。馬

頭なりける人、

世の中にたえて櫻のなかりせば

春の心はのどけからまし

となむよみたりける。又ある人の歌、

散ればこそいとゞ櫻はめでたけれ

うき世になにか久しかるべき

とて、その木の下は立ちて歸るに日暮になりぬ。歸りて宮に入
らせたまひぬ。夜更くるまで、物語して、さてあるじの皇子入り
て大殿ごもりたまひなむとす。十一日の月もかくれむとすれ
ば、かの馬頭よめる。

あかなくにまだきも月のかくるゝか

山の端にげて入れずもあらなむ

かくしつゝ、まうでつかうまつりけるを、皇子思ひの外にみぐし

大殿ごもり

あらなむ
ありなむ

伊勢物語

二卷、著者不明、在
原業平の行跡を記し
た歌物語、
在原業平、阿保親王
の第五子、在五中將
六歌仙の一人、元慶
四年(西暦)歿年五十
六。

おろさせたまひて、小野といふ所に住みたまひけり。正月に拜
み奉らむとて、小野にまうでたるに、比叡の山のふもとなれば、雪
いと高し、強ひて御室にまうで、拜み奉るに、つれづれにいと物悲
しくておはしければ、やゝ久しく侍ひて、古の事など思ひいでき
こえけり。さても侍ひてしがなと思へど、おほやけの事どもあ
りければ、え侍はで、夕ぐれにかへるとて、
忘れては夢かと思ふ思ひきや
雪踏み分けて君を見むとは
とてなむ、なくく、來にける。

(伊勢物語)

口 繪 參 照

心盡くしの秋風
木の間より漏りくる
月のかげ見れば、心
盡くしの秋は來にけ
り。 讀人不知。(古今
集)

關吹き越ゆる云々

旅人は袂涼しくなり
にけり、關吹き越ゆ
る須磨の浦風。 在原
行平。(續古今集)

枕浮くばかり

ひとり寝の床にたま
れる涙には、石のま
くらもうきぬべらな
り。(古今六帖)

一〇 須磨の秋風

須磨には、いとゞ心盡くしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の
中納言の、關吹き越ゆるといひけむ浦波、よるゝはげにいと近
く聞えて、又なく哀なるものは、かゝる所の秋なりけり。 御前に
いと人少なにて、うち休み渡れるに、一人目を覺まして枕を欵て
て四方の嵐を聞き給ふに、波たゞ此處もとに立ち來る心地して、
涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりになりけり。 琴を少しか
き鳴らし給へるが、我ながらいと凄う聞ゆれば、弾きさし給ひて、
戀ひわびて泣く音にまがふ浦波は

思ふかたより風や吹くらむ

とうたひ給へるに、人々おどろきて、めでたう覺ゆるに、忍ばれて、
あいなう起き居つゝ、鼻を忍びやかにかみ渡す。

人々の語り聞えし
海山

源氏わらはやみにて
北山に詣でた時、人
人國々の勝景を語り
聞えた。(源氏物語若
紫の巻)

千枝

姓不詳

常則

飛鳥部常則、古今著
聞集に繪に巧であつ
た事が出てある。

げに如何に思ふらむ。 我が身一つにより、親兄弟片時立ち離
れ難く、程につけつゝ思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへると思
すに、いみじくて、いとかく思ひ沈む様を、心細しと思ふらむと思
せば、晝は何くれとたはぶれごと打宣ひ紛らはし、つれづれなる
儘に、いろゝの紙をつぎつゝ、手習をし給ひ、珍らしきさまなる
唐の綾などに、さまざまの繪どもをかきすさび給へる屏風のお
もてどもなど、いとめでたく見所あり。 人々の語り聞えし海山
の有様を、遙に思しやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のた
たずまひになくかき集め給へり。「此の頃の上手にすめる千枝
常則などを召して、作繪仕うまつらせばや。」と心もとながりあ
へり。 なつかしうめでたき御有様に、世の物思ひ忘れて、近う馴
れ仕う奉るを嬉しきことにて、四五人ばかりぞつと侍ひける。
前栽の花いろゝ咲き亂れ、おもしろき夕暮に、海見やらるゝ廊

なよゝか

紫苑色

年返りて

源氏二十七歳

南殿

紫宸殿

一年の花の宴

源氏院内の御前で面目を施した。(源氏物語花宴の巻)

院

桐壺院

うちの上

朱雀天皇、第六十一代

櫻かざしし云々

もしきの大宮人はいとまあれや、櫻かざして今日も暮しつ。山邊赤人。(新古今集)

に出で給ひて、たゞずみ給ふ御さまの、ゆゝしう清らなるにところがらは、ましてこの世のものとも見え給はず。白き綾のなよよかなる紫苑色など奉りて、こまやかなる御直衣帯しどけなくうち亂れ給へる御さまにて、「釋迦牟尼佛弟子」と名のりて、ゆるゝかによみ給へる、また世に知らず聞ゆ。

年返りて、日長く徒然なるに、植ゑし若木の櫻、ほのかに咲きそめて、空の氣色うらゝかなるに、よろづの事思し出でられて、うち泣き給ふ折々多かり。二月二十日餘り、いにし年、京を別れし時、心苦しかりし人々の御有様などいと戀しく、南殿の櫻は盛りになりぬらむ、一年の花の宴に、院の御氣色、うちの上のいと清らになまめいて、我が作れる句を誦じ給ひしも思ひ出で聞え給ふ。

いととなく大宮人の戀しきに

櫻かざしし今日も來にけり

大殿の三位中將
源氏の故北方葵上の
兄君

一つ涙ぞ云々

嬉しきも憂きも心は一つにて、別れぬものは涙なりけり。讀人不知。(後撰集)

ゆるし色

笑まれて

いと徒然なるに、大殿の三位中將は、今は宰相になりて、人がらのいとよければ、時世の覺え重くて物し給へど、世の中いと哀に味氣なく、物のをりごとに戀しく覺え給へば、事の聞えありて罪に當るとも、如何はせむと思しなりて、俄にまうで給ふ。打見るより珍らしく嬉しきにも、一つ涙ぞこぼれける。住ひ給へるさまいはん方なく唐めきたり。所のさま繪にかきたらむやうなるに、竹編める垣し渡して、石の階松の柱おろそかなるものから珍らかにをかし。山賤めきて、ゆるし色の黄がちなるに、青鈍の狩衣指貫打窶れて、ことさらに田舎びてもてなし給へるしも、いみじう見るに笑まれて清らなり。取使ひ給へる調度も、假初にしなして、御座所もあらはに見入れらる。碁雙六の盤調度、彈棊の具など、田舎わざにしなして、念誦の具、行ひ勤め給ひけりと見えたり。物まるるなど、ことさ

かひつ物

飛鳥井

飛鳥井に宿りはすべ
しかげもよし、みも
ひも寒しみまくさも
よし、(催馬樂)

若君

源氏の長子夕霧

大臣

宰相中將の父源氏の
舅

泣きみ笑ひみ

酔の悲みの云々

酔悲泪ヲ灑グ春盃ノ
裏、吟苦頓ヲ支フ曉
燭ノ前、(白氏文集一
六別三元微之於邊上
詩)

ら所につけ、興ありてしなしたり。海人ども漁りして、かひつ物
もて参れるを、召し出でて御覽ず。浦に年経る様など問はせ給
ふに、さまざま、安げなき身の愁ひを申す。そこはかとなき囁る
も、心の行方は同じ事なるかなと哀に見給ふ。御衣どもかづけ
させ給ふを、生けるかひありと思へり。
御馬ども近う立てて、見やりなる倉か何ぞなる、稻ども取出で
て飼ふなど珍らしう見給ふ。飛鳥井少し謠ひて、月頃の御物語、
泣きみ笑ひみ、若君の何とも世を思さでものし給ふ悲しさを、大
臣の明暮につけて思し嘆くなど語り給ふに、堪へ難く思したり。
盡きすべくもあらねば、なか／＼片端もえまねばず。終夜まど
るまず、文作り明し給ふ。さいひながら、物の聞えをつゝみて
急ぎ歸り給ふ。いとなか／＼なり。御土器参りて、酔の悲し
みの涙、濺ぐ春の盃のうち。」と、諸聲に誦じ給ふ。御供の人ども皆

涙を流す。おのがじしはつかなる別惜しむべかんめり。朝ぼ
らけの空に、雁つれて渡る。主人の君、

ふる里を何れの春か行きて見む

うらやましきは歸るかりがね

宰相、更に立ち出でてむ心地せて、

飽かなくにかりの常世を立ち別れ

花のみやこに道や惑はむ

さるべき都のつとなどよしある様にてあり。

三月の朔日に出で來たる巳の日、今日なむ、かく思す事ある人
は、襖し給ふべき。」となまざかしき人の聞ゆれば、海面も床しく
て出で給ふ。いと疏に軟障ばかりを引き廻らして、此の國に通
ひける陰陽師召して、祓せさせ給ふ。船にこと／＼しき人形載
せて流すを見給ふにも、よそへられて、

巳の日

上巳の節供。

軟障

堂上にも堂下にも用
ひる。表は生絹で唐
繪をかき裏はねり絹
縁もねり絹の幕であ
る。縦三尺七寸横六
寸、一巾は約一尺、
それに紫の縁がつき、
十程の乳のあるもの
である。

來し方

知らざりし大海の原に流れ來て
ひとかたにやは物は悲しき
とて居給へるさまさる晴に出でて言ふよしなく見え給ふ。海
の面はうらくと風ぎ渡りて、行方も知らぬに、來し方行く先思
しつゞけられて、

八百萬神も哀と思ふらむ

犯せる罪のそれとなければ

と宣ふに、俄に風吹き出でて空もかきくれぬ。御祓もしはてず、
立騒ぎたり。肱笠雨とか降り來て、いとあわたゞしければ、皆歸
り給はむとするに、笠も取りあへず。さる心もなきに、よろづ吹
き散らし、又なき風なり。波いと厳しう立ち來て、人々の足を空
なり。海の面は衾を張りたらむやうに光り満ちて、神鳴り閃め
く。落ちかゝる心地して、辛うじて辿り來て、かゝる目は見ずも

はらめき落つ

あるかな。風などは吹けど、氣色づきてこそあれ、淺ましう珍ら
かなり。」と惑ふになほやまず鳴りみちて、雨の脚當る所通りぬ
べく、はらめき落つ。かくて世は盡きぬるにやと、心細く思ひ惑
ふに、君は長閑やかに經打誦じておはす。

暮れぬれば、かみ少し鳴りやみて、風ぞ夜も吹く。多く立てつ
る願の力なるべし。「今暫しかくだにあらば、浪に引かれて入り
ぬべかりけり。高潮といふものになむとりあへず人害はるゝ
とは聞けど、いとかゝる事は、まだ知らず。」といひあへり。

曉方皆うち休みたり。君も聊か寢入り給へれば、そのさまと
も見えぬ人來て、など、宮より召しあるには、參り給はぬ。」とて、辿
りありくと見るに驚きて、さは海の中の龍王の、いといたう物め
でするものにて、見入れたるなりけりと思すに、いと物むつかし
う、この住ひ堪へ難く思しなりぬ。

(源氏物語)

宮

離宮をさす。

源氏物語

五十四帖、一條天皇
の時(卷六十一)卷二紫
式部の著した小説。
紫式部、藤原爲時の
女、上東門院に仕ふ、
生歿年不明。

二枕草子抄

一四 季

春は曙 やう／＼白くなりゆく山ぎはすこしあかりて紫だ
ちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜 月の頃は更なり。 闇もなほ螢とびちがひたる。 雨
などの降るさへをかし。

秋は夕暮 夕日はなやかにさして、山の端いとちかくなりた
るに、鳥のねどころへ行くとして、三つ四つ二つなど飛び行くさへ
あはれなり。 まいて、雁などのつらたるとるが、いと小さく見ゆる、
いとをかし。 日入りはてて、風の音蟲のねなど、いとあはれなり。
冬は朝 雪の降りたるは、いふべきにもあらず、霜などのいと

火桶



なりぬるは

香爐峰の雪
遣愛寺ノ鐘ハ枕ヲ欲
テテ聴キ、香爐峰ノ
雪ハ簾ヲ撥ゲテ看ル。
(白氏文集)
御格子参る

白き、また、さらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわた
るもいとつき／＼し。 晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭
櫃火桶の火も白き灰がちになりぬるはわりし。



音 納 少 清

二 香爐峰の雪

雪いと高く降りたるを、例ならず御格子参らせて、炭櫃に火お
こして、物語などしてあつまり候に、少納言よ、香爐峰の雪はいか

思ひこそ…つれ

ならん。」と仰せられければ、御格子あげさせて、御簾高くまきあげたれば、笑はせ給ふ。人々もみなさる事は知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそよらざりつれ。「猶この宮の人には、さるべきなめり。」といふ。

三にくきもの

長ごと
あなづらはし
心はづかしき人

いそぐことあるをりに、長ごとするまらうど。あなづらはしき人ならば、のちになどいひてもおひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人、いとにくし。
硯に髪の入りにて磨られたる。また墨の中に、石こもりてきしきしときしみたる。
物羨みし、身の上なげき、人の上いひつゆばかりのこともゆかしがり、聞かまほしがりて、いひしらせぬをば、ゑんじそしり、また

ゑんじそしる

さかしがる

いひくたす
らうたがる

調度

枕草子

清少納言の隨筆
清少納言—清原元輔
の女—一條天皇の皇
后に仕ふ、生歿年不
明

僅に聞きわたることをば、我もとより知りたることのやうに、こ
と人に語るもいとにくし。

物聞かんとおもふほどに泣くちご。鳥の集まりて飛びちが
ひ鳴きたる。ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊のほそごゑに名
のりて、顔のもとに飛びありく。羽風さへ身のほどにあるこそ、
いとにくけれ。
11.29

物がたりなどするに、さしいでて、われ一人さかしがるもの、す
べてさし出は、わらはもおとなもいとにくし。むかし物語など
するに、わが知りたりけるは、ふと出でていひくたしなどする、い
とにくし。

あからさまに來たる兒ども、わらはべをらうたがりて、をかし
きものなどとらするに、なれて常に來てゐりて、調度などうち
ちらしぬるにくし。

(枕草子)

佐佐木信綱
三重縣の人、明治五
年生、歌人、文學博
士。
簡素

一二 萬葉集序説

佐佐木信綱

古來歌集は多いけれども、その想の純眞簡素のうちに人心の基調を傳へて、さながら歌の故郷ともいふべく、詩歌の不朽の生命の源泉を爲せるものは萬葉集である。

萬葉集といふ名の起りに就いては、「萬の世」といふ説と「萬の言の葉」といふ説と二つある。いづれも當時流行した文選淮南子等の漢籍中の文字に出たものとされる。兩説のうち「萬の世」の方が支那にも日本にも多く用ひられてゐるので、その方に左祖せられる。なほいま一説には、多くの木の葉の義で、多くの歌を集めた譬喩に用ひたものといふ説がある。

これを選んだのは橘諸兄とも、諸兄及び大伴家持ともいひ、更

文選

三十卷、梁の蕭統撰、文章詩賦を蒐む。

淮南子

二十一卷、漢の淮南王劉安の撰。

左祖

に家持の私選といひ、諸説あるが、吾人の考では、全部が一人の手によつて選ばれたものではなく、數種の集の草稿類があるところ(大伴家ならむ)にあつめられ、其のまゝ一部の書として傳はつたものであらうと思はれる。

雜歌

白痴創倉宮衛守大百福和武天皇

御歌一首

著者不明小抄の今計座に今夜者ト抄録ナ

尺箱

ゆゑ、いそをくるとわたりとわたりと

こゝろをわたり、いづらりとも

我々の世々天皇御歌一首

世々宮中守天皇御歌一首

藍紙本萬葉集

併し草稿のまゝで精選してないといふことが、歌集であるだけに、少しの障も無いのみならず、却つて當時のいろいろの歌風が窺はれて面白のである。萬葉集が精選

を経ずに傳はつたのは、寧ろ吾人の幸福である。草稿だけに、その體裁も或は整ひ、或は整つて居らぬ。卷數二十卷、分類した卷には、雜歌・相聞挽歌・譬喩・四季雜歌等の目がある。

旋頭歌

歌體からいへば長歌二百六十二首、短歌四千百七十三首、旋頭歌六十一首となる。長歌、旋頭歌がかく多くあるのは、此の集の特色である。

時代は奈良朝、更に詳しくは藤原朝(持統文武)——二十三年間、奈良朝(元明以後淳仁に至る)——四十八年間合計約七十一年間を代表し、集中の歌は概ね其の間の作で、而も短い藤原朝の間の作は、長い奈良朝の間の歌に比して数が少なからぬやうに思はれる。併し一々の歌に就いては、持統以前の作もかなり有り、最も古くは仁徳・允恭・雄略帝時代の作もある。

作者は其の名の知られたものと知られないものと相半ばし、知られたものに就いて見るに、上は帝王皇后皇族大官より、下は庶人に至るあらゆる階級の人を含んでゐる。これまた後代の勅撰集に見ぬ此の集の特色である。

庶人

其のうたはれた題材から見ると、地理的に言へば、北海道を除いて殆ど日本全國にわたつてゐる。大和をはじめ、近畿を中心として、東海・東山・西海・北陸・南海・山陽・山陰諸道の諸國の地名・風土はすべてうたはれてゐる。品物的に言ふと、鳥獸・魚介・草木の類から器材・服食に至る迄すべて取扱はれてゐる。これだけでも萬葉集の歌が當時の人々の日常生活のすべてと交渉して居た事がわかる。それで後世の歌に見る様な特別な歌題と言ふものが未だ無かつたので、其の歌は孰れも當時の人々の實際の經驗と交渉して居る。要するに歌と言へば、特殊の人士が、花鳥風月の風流とか、名所とか、又一定の題目とかによつて、想を構へたものとなつて了つた後世の狭い題詠とはまるで違つてゐる。それだけに歌として見て、到底後の歌に見得べからざる面白みがある。

次に萬葉集の奈良朝文化に於ける位置に就いて考へて見よう。

そもく、奈良朝といふのは、今更言ふまでもなく、わが國の文化史上の黄金時代もとよりその文化は専ら帝都に限られてゐて、範圍の狭いものであつたが、而して丁度現今の我が國が、歐米諸國の文化を採り入れて立派な發達をしてゐるやうに、當時はその頃隆盛の域にあつた支那の文明を採り入れて、光彩まばゆい有様を呈してゐた時代であつた。

この奈良朝の文化が、後代にのこしたほとんど不滅の事業として、萬世に傳へなければならぬものがある。これは一般の文化が進歩した後代、もしくは今後に於ても、永久にその光彩を失はぬのであらうと思はれる。それは何であるか。即ち當時の美術と文學とである。而して文學とは、即ちこの萬葉集の歌で

神往の感

ある。

奈良に遊んで、千年の風雨に堪へて今なほ當時の偉觀を忍ばしめるところの幾多の建築物、彫刻物を觀た人は、我等の祖先が、上世に有した立派な文化にまのあたり接して、一種神往の感に打たれざるを得ぬであらう。而してかの藥師寺の建築、彫刻、東大寺の大佛、三月堂の諸像等が出來たと同時代に、萬葉集が生まれたのである。萬葉集の作者も、彼等美術家も、共に同時代の人である。彼等によつて實に奈良朝文化は創り出されたのである。しかも更に萬葉集の作者と、彼等美術家とが、それく、奈良朝文化について有する位地と意義とを考へると、大いに異なるものがある。蓋し、彼等美術家達が、國民中の少數者たる天才であり、しかも多くは三韓、支那の歸化人、もしくはその子孫であつたのに、彼等萬葉の作者は當時の國民一般であつたといふこと

である。この點に於て、吾人は萬葉集によつて當時の我が日本國民の感情といひ、氣力といひ、知識といひ、道義的觀念といひ、即ち國民性てふものを、血と肉とに於て感ずることが出来るのである。しかも或はその美しさに於て、或はその雄々しさに於て、或はその敏さに於て、或はその敦厚といふ事に於て、我が上代人の國民性は歴史上大いに貴しとすべきものであつた。この事は、實に吾人が萬葉集によつて知り得るところであると同時に、その故を以て萬葉集は實にかの諸美術品にもまして一層貴重なる人間的創作たるを得るのである。萬葉集を有するのは實に我等國民の誇である。

(増訂萬葉集選釋)

二三 萬葉集より

長歌

近江の荒都を過ぐる時

玉だすき	畝火の山の	榎原の	柿日本入 磨
生れましし	神のことく	櫻の木	ひじりの御世
天の下	しろしめししを	空に見つ	大和をおきて
青丹よし	なら山を越え	いかさまに	おもほしめせか
天ざかる	鄙にはあれど	いはばしの	近江の國の
さゝ波の	大津の宮に	天の下	しろしめしけむ
すめろぎの	神のみことの	大宮は	こゝと聞けども

大殿は こゝといへども 春草の 茂く生ひたる
霞たつ 春日のきれる 百敷の 大宮どころ
見ればかなしも

反歌

さゞ波の志賀の辛崎さきくあれど大宮人の船まちかね
つ

不盡山を望みて

山部 赤人

天地の わかれしときゆ 神さびて 高く貴き
駿河なる 不盡の高嶺を 天の原 ふりさけ見れば
わたる日の かげもかくろひ 照る月の 光も見えず
白雲も いゆきはゞかり 時じくぞ 雪はふりける

語りつぎ 言ひつぎゆかむ 不盡の高嶺は

反歌

田兒の浦ゆうち出でて見ればましろにぞ不盡のたかね
に雪は降りける

子等を思ふ歌一首

山上 憶良

瓜食めば 兒ども思ほゆ 栗食めば まして忍ばゆ
何處より 來りしものぞ まなかひに もとなかゝりて
やすいしなさぬ

反歌

しろがねも黄金も玉も何せむにまされるたから子にし
かめやも

短歌

天智天皇

わたつみの豊旗雲に入日さしこよひの月夜あきらけく

こそ

湯原王

吉野なる夏實の川のかはよどに鴨ぞ鳴くなる山かげに

して

額田王

熟田津に船乗せむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出

てな

柿本人麿

あしびきの山川の瀬の鳴るなべに弓月が嶽に雲たちわ

たる

小野老

青丹よし奈良の都は咲く花のにほふがごとく今盛りな

り

山部赤人

み吉野の象山のまの木ぬれにはこゝだもさわぐ鳥の聲

かも

大伴家持

わが宿のいさゝ群竹吹く風の音のかそけきこのゆふべ

かも

海犬養岡麿

み民あれ生けるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらく

思へば

一四 倭建命

天皇
景行天皇、第十二代
御子
日本武尊
小碓命
日本武尊の御名、
まつろふ

こゝに天皇その御子小碓命に詔りたまふは、「西の方に熊襲建二人あり。これ伏はず、禮なき人どもなり。かれその人どもを取れ。」とて遣はさる。此の時その御髪額に結はれしとなり。こゝに小碓命その姨倭姫命の御衣御裳を賜はりて、劍を御懷に納れて幸す。

かれ熊襲建が家に到りて見たまへば、その家の邊を軍三重に圍み、室を作りて居り。こゝに新室樂す。」と言ひ動みて、食る物を設け備ふ。かれその傍を遊行きてその樂する日を待ち給ふ。こゝにその樂の日になりて、その結はせる御髪を童女の髪のごとくすべらかして、その姨の御衣御裳を服して、かくて童女の姿になりて、女人どもの中に交りたちて、その室の内に入りぬま



日本武尊

す。こゝに熊襲建兄弟二人、その嬢子を見めて己が中に坐せて、盛りには樂げたり。かれその酣なるときを見はからひて、御懷より劍を出して、熊襲が衣の衿を取りて、劍もてその胸より刺し通し給ふ時に、その弟建、見畏みて逃げ出づ。乃ちその室の櫛の本に追ひ至りて、その背を取らへて、劍もて尻より刺し通したまふ。こゝにその熊襲建まをす、その御刀な動かし給ひそ。僕申すべき事あり。」と。かれ暫し許しておし伏せたまふ。こゝにまをす、汝が命は誰にますぞ。「吾は纏向之日代の宮にましまして、大八島國知ろしめす大

な...そ
纏向の日代の宮
大和國磯城郡纏向村
に在つた景行天皇の
宮殿
大帶日子淤斯呂和
氣天皇
景行天皇

帶日子淤斯呂和氣の天皇の御子、名は倭男具那の王といふぞ。おれ熊襲建二人伏はず禮なしときこしめして、「取り殺せ、おれ」とみことのらして遣さる。」と詔らす。こゝにその熊襲建、信にかまさむ。西の方に吾二人を除きて、建く強き人無し。然るに大倭の國に、吾二人にまして建き男は坐しけり。かれ吾は、御名を獻らむ。今より後、建の御子となのりませ。」とまをす。この事まをし訖へる即ち熟菰のごと、振り拆きて殺されしとなり。かれその時より倭建の命とまをす。

(古事記)

古事記

三卷、元明天皇の和銅五年(三三)正月二十八日太安萬侶が撰録した歴史書太安萬侶(神武天皇の皇子神八井耳命の子孫、養老七年(六二)没、年不明)

徳富蘇峰

名は猪一郎、熊本縣の人、文久三年(五三)生、評論家。

一五 國民的自力主義

徳富蘇峰

日本帝國の運命は、日本國民の自力に據りて支持せられ、繼續せられ、開展せらる。吾人が自力主義を主張するは、畢竟我自ら我を恃む外に方便も手段もあらざればなり。よし千百の方便、手段ありとするも、その自力主義踐行の後に於て、始めて其の效用を見るべければなり。

然りと雖も、吾人の所謂自力主義は決して自滿主義にあらず、自足主義にあらず。何ぞ況や鎖國主義をや、排外主義をや。吾人は我が短を補ふべく、世界のすべての長を探らざるべからず。吾人は飽くまで籠城割據の風を破りて、世界と歩調を一にせざるべからず。而もこれ唯内に自ら主持する所ありて、而して後外に向つて之を求むべきのみ。

吾人は、我が國民が精神的に獨立し、而して後、世界的に協調せんことを望む。精神的の獨立とは何ぞや。日本國民は日本國民として、其の獨特の立脚地に於て、内外一切の經綸を定むることこれなり。東洋のドイツにあらず、東洋の英米にあらず、日本は東洋の日本としてなり、日本の日本としてなり。即ち我自ら我が固有の歴史的系統に則り、我自ら我が國民的見地に據りて裁斷を下すにあるのみ。此の如く、内既に支持する所あり、乃ち外に向つて其の益を求む、必ずしも英米と云はず、必ずしも、獨佛と云はず、世界の長は皆採りて以て我が有と爲すべし。復何をか顧慮し、何をか遲疑せんや。

惟ふに、我が國當今の憂は、第一國民の惰氣滿々たることなり。別言すれば國民猛志を消磨し、小成に安んずるにあり。曰く、日本は既に五大國の一に位せり。曰く、日本は既に東洋の盟主たり、曰く日本は既に富強なり」と。而して更に磨礪自彊し、此の國運を進一轉せしむるを閑却しつゝあるなり。

第二、世界の大大勢を根本的に謬解したるにあり。曰く、世界は泰平なり。今後は戦争らしき戦争は絶無なるべし。國際的葛藤は聯盟によりて自動的に按排せらるべし」と。彼等は其の待つあるを待まず、其の來るなきを待み、其の待むべきを待まず、待むべからざるを待むなり。

第三、我が日本帝國は世界に孤立せり。孤立といはんよりも多くの者より排斥せられつゝあり。是必ずしも日本國民の罪とのみ謂ふべからず。而も其の原因はいづくにあるにもせよ、事實は正しく此の如し。而して我が國民は、此の如き不愉快なる事實を正視し、認識し、之に處する所以の道を講ぜざるは何ぞや。

磨礪自彊

國際的葛藤

待つあるを待まず
兵ヲ用フルノ法ハ其
ノ來ラザルヲ待ムコ
トナク、吾以テ待ツ
アルヲ待ムナリ。其
ノ攻メザルヲ待ムコ
トナク、吾攻ムベカ
ラザル所有ルヲ待ム。
(孫子)

苟安
偷取

一寸の蟲にも五分
の魂

第四、我が國民は物質的に驕慢となり、精神的に萎縮せり。退いて自力の足らざるを慚ぢ、自國の缺陷を補ふことを勗めず、進んで世界に向つて自國の真相を闡明し、世界の誤解を正すことを努めず、唯その日暮しに一時の苟安を偷取しつゝ、あるは何ぞや。

第五、一寸の蟲にも五分の魂あり。如何に世界の迫害を被るとも、我が國民にして自ら道義的大自信あらば、何をか懼れ、何をか憚らんや。今日の憂は、日本帝國が世界的迫害の中心たるに非ずして、日本國民の道義的自信力の失墜にあり。

蓋し、吾人が自力主義なるものは、内に國民の道義的自信力を扶植し、先づ自ら不敗の地位を占め、而して後、徐に外に向つて我が志を行ふにあるのみ。此の如くして世界と協調を保つべく、此の如くして東洋の盟主たるべく、此の如くしてアングロサク

角逐

糊塗

痛楚

ソン民族と角逐して、世界の文明に貢献し、大和民族の天職を全うするを得べきのみ。今日の如く、我が國民自ら信ぜずして他を信じ、自ら頼まずして他を頼み、放恣、怠慢、強ひて自ら欺いて眼前を糊塗し去らんとし、此の如くして止むなくんば、我が帝國は精神的に死亡するなり。

世界の歴史は進歩の歴史なり、改善の歴史なり、向上の歴史なり。吾人は如何に一方に痛楚號泣するが如き現象を見るも、他方には光明と平和との到來を疑ふ能はざるなり。但し之を果さんが爲には、非常なる危険、非常なる艱難、非常なる苦痛を経ざるべからず。即ち今や吾人は此の一大試煉の時期に遭遇するものなり。當面の問題は、我が日本國民が果して之に及第するか否かに在るのみ。

國歩艱難
人は艱難に生きて
安逸に死す

嘉永安政の際に於て、我が日本は全く内憂外患の危機に擠されたりき。而も我が先人は種々の失敗過誤を累ねたるに拘らず、遂に之を排除して維新中興の新局面を打開せり。顧ふに明治半百年に互れる國運の増進は、固より明治天皇聖徳の致す所なるも、亦嘉永安政より元治慶應に至る國歩の艱難によりて之を培養したるものといはざるを得ず。人は艱難に生きて安逸に死す。國も亦然り。英佛兩國の現時に於て再生復活しつゝある所以、亦固より大戦の大試煉を経來りたるが爲のみ。吾人は之を我が國の過去に徴し、之を英佛諸國の現在に徴し、我が帝國の前途に横たはる無数の危殆困難を豫想して、毫も自ら失望落膽せず。若し然るべき理由あらば、そは無数の危殆困難そのものにあらず、寧ろこれに氣付かず、空々寂々、悠悠緩々として、苟且偷安を事とする我が國民的精神の潰破、これのみ。

苟且偷安

十字街頭に立つ

我が國民が自ら冒進するにせよ、はた回避するにせよ、何れにしても我が國民的の一大試煉の時期は既に到來しつゝあるなり。此の上の問題は、果して國民的の一大決心、一大努力、一大奮闘もて之に打克たるべきかにあり。吾人は先づ我が國民が國運の消長興廢の十字街頭に立つことを自覺せんことを望む。次に此の國家的の一大危機に向つて勇進し、潔く此の一大試煉に及第せんことを望む。而もこれ決して容易の業にあらざるなり。吾人日本國民は、何れも國家的に大死一番して、而して後其の再生復活を期せざる可からず。如何に國家の難局を逃避するも、來る可きものは遂に來らざるを得ざるなり。吾人は寧ろ今日に於て之を覺悟し、鐵石の心腸もて之に當る決心なかるべからず。輕々しく其の趾を擧ぐる勿れ、漫に其の腕を扼する勿れ。忍ぶべきは忍べ、耐ふべきは耐へよ。只我が大和民族たるものは世

鐵石の心腸

界公論の容す所に據り、天下の大道を行ひ、國際共通の正義を旨とし、以て我が所信を遂げよ。吾人は我が力を恃むとともに、我が正義を恃みとす。此の如くして與國の我を扶くるあらば、與國と共にすべし。苟も與國なくんば、我躬ら往くべき道を往かんのみ。

吾人は決して外患を恐れざるなり。若し眞に畏る可きものあらば、そは内憂にあり。内憂の中殊に畏る可きは國民的志趣の消磨にあり。知らず、我が國民は大死一番、以て自ら新生命を贏ち得る覺悟あるか。活裡死あり、死中活あり、生を欲する者は死、死を敢てするものは生。國家の前途を解決すべき祕機は、只此の死生の二字中にあり。

(大戰後の世界と日本)

阿部次郎

山形縣の人、明治十六年生、文學博士、東北帝國大學教授

一六 生活の中心

阿部次郎

自分はすべての人に勧めるに、その生活の中心をこしらへることを以てしたい。その中心を中心として、日々の生活を調整すること、を以てしたい。もしその中心を發見することが容易でないならば、自分は生活の中心を求め、それを以て、それまでの生活の中心とすることを勧めたい。

諸子が學校にゐる間は、學校の課程が、外部的ながら、諸子の生活に一種の中心を與へてゐる。諸子は、諸子の生活を調整すべき具體的秩序を手近に持つてゐる。

随つて、たとひ學校をつまらないものと見る人々でも、なほこれによつて、自分の生活に一種の具體的内容の與へられてゐることは、争ふことはできないであらう。しかし、諸子が學校を卒

業して、授業時間や、課題や、練習や、試験の束縛を脱れる時、諸子はまた一方に、何となく日々の生活に具體的内容を缺いて、退屈と空虚を感じることを禁じ得ないであらう。學校に代つて諸子の生活の中心となるものが、直ちには諸子の手に落ちて來ないであらう。多くの人は、學校を卒業すると共に、何かをしなければならぬ義務を他人から負はされるか、もしくは自らの感情の中に負ふを常とする。しかし、今日の社會は、我等の卒業を待ち受けてゐて、直ちに我等に適當な活動の地を與へるやうな社會ではない。さうして、自ら活動の地を造り出さうとするにも、我等は自己の内面に確さの自信を缺き、我等の働きかけるべき社會に對する適當な知識を缺いてゐるが故に、内外兩様の意味に於て、どこから手をつけていゝかわからなくなる。かくて、焦躁と、空虚と、この二つの相反したやうで相近似した感情は、手を携

へて我等の生活に迫つて來る。さうして、我等はあせればあせるほど、益、生活の中心を失つた感じに捉はれなければならぬ。自分は、學校を卒業すると、直ちにこの病に捉はれて、學校卒業後の二三年は、まるで何事も手につかなかつた。さうして、この状態を脱却するまでには、自分としては堪へ難いほどの忍耐と節制とを積まなければならなかつた。故に自分は、卒業の諸子を送るに當つても、特にこの點に關する注意を請はなければならぬ。

凡そ、人生は短く、人生は長い。爲すべきものを持つてゐるものには、六七十年の歲月は須臾にして流れ去るであらう。しかし、何事にも倦んだ心に取つては、五十年の壽命も、長い退屈な旅と思はれるに違ないのである。さうして、この短い生涯を空過しないためにも、この長い一生を退屈せず暮らすためにも、我

等には生活の中心が必要である。自分は、中心を缺いた生活の中にある充實と幸福とを考へることができない。

そこで我等の問題は、更に一步を進めて、いかにして生活の中心を發見すべきかといふことに移る。この問題に對する解答も、また固より容易ではないが、自分には、その具體的方法として一つの考案がある。

といつても、それは何も珍らしいことではない。最も自分に適しさうな人を選んで、その人の内面的發展を精細に跡付け、その通つた道を自分も内面的に通つて見ることである。約言すれば、自らその「師」を擇んで、自己の鍛鍊をその「師」に託することである。師の奴隸とならずに、しかも「師」を信賴して、常に「師」に照らして、自己を發見する途を進めることである。

自分は、自分たちの受けて來た纏まりのない教育と、いたづら

飯山

長野縣下水内郡飯山町

白隠和尚

駿河の人、黄檗宗の高僧、明和五年(一八二七)寂、年八十四。

高社

長野縣下高井郡飯山町の南

に漠然とした廣い知識とをおもふ毎に、古人の受けた鍛鍊と訓育とを羨ましいと思ふ。自分は、この春、信濃の飯山に行つて、白隠和尚修業の地なる正受庵を訪うた。庵は高社たかやしろの山を望み、千曲川を望む小丘の上にあつて、杉の老樹の生ひ繁つた幽邃な境にある。初め白隠が惠端和尚をこの庵に訪うた時、惠端は白隠を崖から蹴落したさうだ。白隠はそれにも懲りずに、惠端に師事したさうだ。さうして、或日白隠が一つの悟を得て、その坐禪の座から彼は戸外の石上に坐して工夫を積んだといふことである。歸つて來るときに、惠端は縁の端に出て、遠くから手招きをしなが、白隠を歓迎したさうだ。

自分はその話を聞いて、白隠と惠端との間が羨ましくてならなかつた。自分にも、自分を崖から蹴落してくれる師匠、縁側から自分を手招きしてくれる師匠があたら、どんなに幸福なこと

であらう。師弟とは、與へられるだけ與へ、受けられるだけ受けんとする、二個の獨立せる、しかも相互にふかく信賴せる靈魂の關係である。弟子をその個性のまゝに一人の「人」とするところに、師の師たる所以があり、その稟性に隨つて、一個の獨立せる人格となるところに、弟子のもつとも多くその師に負ふ所以がある。「道」の傳統は、何等かの意味に於ける師弟の關係を経て、始めて内面的に生きるのである。

固より、師に就くことは、自分の生活内容を、その師の供給に仰ぐといふことではない。我等が愛し、憎み、努め、怒る心は、我等が我等自身の中に豫め持つてゐなければならぬところである。これ等の愛憎や、喜悲は、我等の生活を刻々に新な境涯に漂はしめ、往々にして、我等の生涯を困惑と、壅塞と、彷徨と、昏迷の境に導く。この窮境を拓き、この關門を透過する努力に於て、我等は始

昏 塞
迷 塞

めて「師」の忠言を必要とするに至るのである。我等が師に就いて學ぶべきところは、問題の解き方である。途の切拓き方である。生活内容を流れ行かしまべき方向である。もし我等自身の中に、豫め生活内容を有することなく、一定の傾向を有することなく、解決を要する問題を有することがないならば、師に就くことは、全然無意味でなければならぬ。故に生活の中心を求め、るために、古人の著作を研究するといふ時、我等の生活の意味は、讀書にあるのではなくて、我等の内面的知覺を開拓して、これを正しい方向に導いて行くところにあることは、繰り返すまでもないことである。書を讀むことは、自ら生きること、停止すること、を意味するならば、また他人の著作を研究することは、自ら省みる事を中斷することを意味するならば、我等は固よりいかなる場合にも、書を讀むことを、他人の思想を研究することを、

第一義諦

生活の中心とすべきではない。こゝに讀書といひ、研究といひ、師に就くといふのは、自ら生き、自ら省みる爲の一つの途を意味するものであることは、明瞭に記憶して置く必要がある。我等が師に就いて學ぶことを要する第一義諦は、行住坐臥に師の言葉を読誦することではなくて、何よりもまづ、師と同一の勇氣を以て、人生に衝き當ることとでなければならぬ。自己の直接經驗を基礎として、人生の疑に觸れ、人生の疑を解く途を求めるところとでなければならぬ。

自分は今、最も自分に適しさうな師を選んで、これを師とすべきことをいつた。しかし、こゝに「最も自分に適する」といふのは、現在の自分が最も愛好するもの、現在の自分が最も親しみ易いもの、換言すれば現在の自分の程度を以ても、容易に接近し得べきものといふ意味ではないのである。此の如き「師」は、たゞ

偏局

我等をあまやかすもの、現在に於ける我等の偏局した發展を、更に一面的に偏局せしめるものに過ぎないであらう。現在の自分、自分の本質の一切ではない。我等の本質の中には、無限の可能性がある。他日、我等の本質の中から、現在の自分には思ひも寄らぬ花が咲き出る日がないことを、誰か保證することができよう。我等の「師」は、我等の本質の中から、これらの數多き可能性を引出す力があるものでなければならぬ。我等を鞭撻して、常により高い階段を望ましめる力を持つてゐるものでなければならぬ。約言すれば、我等を吐り、我等を引上げ、我等を打碎き、我等を改造するに足るほど、複雑で偉大なものでなければならぬ。この意味に於て、我等に「無理」を強ひる力のないものは、我等の師と仰ぐに値せぬものである。

(三太郎日記)

三宅雪嶺

名は雄次郎、金澤市の人、萬延元年生、政論家、文學博士。

大上有立德

左傳に出てゐる穆叔の語。

ホーマー

西紀前九百五十年頃の希臘の大詩人。

達德

智仁勇三者ハ天下ノ達德ナリ。(中庸)

一七 人生の目的

三宅 雪嶺

支那に三不朽の説あり。「大上有立德。其次有立功。其次有立言。雖久不廢。此之謂不朽。」と曰へるものこれなり。言古しと雖も、其の意は今に新たなり。世界に其の例を擧ぐれば、孔子釋迦耶蘇の如きを立德とし、該撒奈破崙の如きを立功とし、ホーマー以下の文學者を立言とすべし。この三不朽を智仁勇の達德に配當せば、立德は仁、立功は勇、而立言は智なり。立功にも智を要し、立言にも勇を要すれど、主要なるものを擧ぐれば各、特色あり。中に史的の意義ありて現代に認むるを難んずるは立德なり。現に立功家及び立言家のすくなからざるに、稱して立德家とすべき者を何處に見るか。立功及び立言は全く現實の事にして、過去にもあれば、現在にもあり、將來にもあるべく、

帯木

蘭原や布施屋におふる帯木の、ありとは見えて迄はぬ君かな坂上是則。(新古今集)

文帝

曹丕(四七—八六)

ヴォルテール

佛國の歴史家、詩人。(西曆一六九四—一七六六)

立德の漠然たるが如くならず。今は立德の形跡あるものも、立功と立言との孰れかに屬すべきが如し。三不朽の中、立德は人の欲求する所の絶頂にして、聖たり佛たるは人生第一の快事なるかに、考へらるれども、帯木の如く之を求めて遂に見失ふに終らん。現代の人の志す所は、立功ならざれば立言なり。魏の文帝曰く、「年壽有時而盡、榮樂止於其身。二者必至之常期、未若文章之無窮。」と。是、文事に與る者の期せずして考へ及ぶ所にして、「筆は劍より強し。」といふも、其の旨相近し。ヴォルテール曰く、「功名心ある者にして悉く目的を達し得べくば、悉く文字の人となるべし。」と。ホーマーは傳明らかならざれど、傳説に依れば、琴を携へて人の門前に立ち、且謠ひ且語れる者なりきといふ。明を失ひしが上、門附の如く絃歌して錢を乞ひし者ならば、苦痛なる生活を送りしなるべきに、後世之を歎美して已ま

司馬相如

字は長卿、支那漢代の人、詩文に長ず。武帝の世(西暦前四一前八一)歿、年不明。

左思

字は太冲、支那晋代(西暦三三一三二六)の人、文章家、歿年不明。

杜甫

字は子美、支那唐代の人、詩人、代宗の大暦五年(西暦七五七)歿、年五十九。

人間知己少

豊前の詩人村上佛山の句。

ず、彼の如くんば死すとも可なりとする者多し。凡そ苦心慘憺の甚しきこと、詩人の句を撰するが如きは少し。司馬相如の子虚賦、左思の三都賦、辭を練るに全力を用ひき。杜甫が「爲人性癖耽佳句。句不驚人死不休。」といへる、眞に實狀なり。幾多詩人中には、強ち人を驚かさんとせず、或は之を喜ばしめんとし、或は之を悲しましめんとし、或は之を別乾坤に導かんとするもあるべけれど、要するに皆多少目的を達する所に愉快を感じ、洛陽の紙價を貴くせる時、誠に大勝利を得たる如く悦びたるならん。己の以て絶佳とする所、人全く解せず、外に出でて衆に笑はれ、内に入りて米鹽に窮する時、若し猶自ら信ずること篤くば、當世に屈して後世に伸ぶるあるを以て慰めたるなるべし。又實に當世に屈して後世に伸ぶるものあり。「人間知己少、破硯是良朋。」といへるは知己の少くして愈、得意を感じざるなり。

賈誼

支那漢代の人、文章家、文帝の十三年(西暦前二七)歿、年三十三。

蘇軾

支那宋代の人、文章家、哲宗の建中靖國元年(西暦一一一三)歿、年五十五。

マコーレー

英國の歴史家、文學者(西暦一八〇一—一八五九)。

カーライル

英國の歴史家、文學者(西暦一七五五—一八二六)。

ミケランジェロ

伊太利の畫家、彫刻家(西暦一四七五—一五六四)。

カギソシキ 賈誼蘇軾の策論は正しく立言なり。

世に論文と稱するは皆然り。論文といふも全篇悉く議論より成るとは限らず、或は議論を敘事の間に挿むあり、或は議論を挿まずして自然に主張あるあり。マコーレーの英國史は歴史にして自由主義を鼓吹し、カーライルのフレデリック傳は傳記にして人格の堅實を奨勵せるなり。東洋の史傳は皆多少主張あり。爲に史實を枉ぐとの非難あれど、史實を枉げずして主張するを得ずとは謂ふべからず。

形を異にして實を同じくするは詩と藝術と、文學と科學となり。「言は意を盡くさず、文は言を盡くさず。」といへり。立言は即ち立意にして、凡そ目的を達し得るものは宜しく立言と見るべし。藝術家の製作に従事するは楽しきか、楽しからざるか。楽しくとも、世間の想像する所とは同じからじ。ミケランジェ

ダーウイン
 英國の生物學者（西曆一八〇九—一八八二）
 シェクスピア
 英國の戯曲家（西曆一五六四—一六一六）
 アルキメデス
 希臘の數學者・哲學者（西曆前二六七—二三二頃）

ロの工場に入りし者は彼の努力に驚かざるなし。夜更けて眠りしかと思へば、突然起きて頭に蠟燭を翳し、着手しつゝある製作に従事す。シスト禮拜堂の天井畫を完成せし時、絶えず仰ぎ居りしが爲に頸が曲らざりきといふ。上下に重んぜられて、生活も豊かなりしが、肉體の満足を事とせず、繪畫及び彫刻に汲々たりしは、苦心慘憺の間に漸く理想に近づく愉快の禁じ得ざるものありしに因りてなり。科學家は天地の美を讚歎せず。世間に美として讚歎する所も、嚴密に分解し、眼中美もなく醜もなし。ダーウインは自ら歎じて曰ふ、「吾はシェクスピアを讀みて少しも興味を感じず」と。初より感ぜざりしにあらざり、生物の研究を専らにし、遂に之を感じざるに至りしなり。アルキメデスは兵卒に襲はれし時、正に沙上に幾何學の圖を描きて一意研究しつゝあり。兵卒を顧みて曰ふ、「暫く待て。問題を決せん。」

英雄何必讀書史

英雄何ソ必讀書史ヲ讀マン、直チニ血性ヲ據ベテ文章ヲ爲ル、仙ナラズ佛ナラズ賢聖ナラズトモ筆墨ノ外ニ主張有リ。清ノ「鄭板橋の詩」風雲に際會す屍を馬革に男兒ノ要ハマサニ邊野ニ死シテ馬革ヲ以テ屍ヲ裹ミ還リテ葬ムラルベキノミ、何ゾ能ク床上ニ臥シテ兒女子ノ手中ニ死セシヤ。（馬援）

天下に横行し
 男子マサニ天下ニ横行シテ自ラ富貴ヲ取ルベシ、誰カ能ク端坐讀書シテ老博士トナラン（北齊、高昂）

歴山
 マケドニア王（西曆前三五六—前三三三）

と。言終らずして殺さる。傳説にてはあれど、科學家の研究に専らなること往々此の如きものあり。眞に研究を念とするものは、必ず別に樂しむ所あり、常人の樂しむ所と異なり。稱して樂しむといふべからずんば、他の何物にも代ふべからざる方針を取りて進みつゝありと謂ふべし。

「英雄何必讀書史」とは單に東洋のみならず、何處にも言ひふるしたることなり。秦平無事の日には斯く考ふる者多からざれど、警報傳はりて多少世間の動搖する時には、風雲に際會すといふを事實にせんと欲し、曰く、「大丈夫當に屍を馬革に裹むべし。」曰く、「男兒當に天下に横行して富貴を取るべし。」と。出でては將、入りては相、若し之を併せ得ること困難ならば、せめて其の一を得るの愉快なるべきを思ひ、軍人たらんか、政治家たらんか、遠きは歴山、近きは奈破崙、人生まれて彼の如くなるを得ば、萬死し

直情徑行

身を律す

て憾なしとす。其の何が望まじきかと問へば、言ふまでもなく天下を掌にし、事として意の如くならざるなきに在れど、彼等果して世人の想像するが如く愉快を感じたりしか。歴山は天真爛漫、直情徑行、一切の偽善を憎み、波斯に遠征して波斯の歡樂に耽りしに似たれど、彼は苟も無道といふを敢てせず。當時の社會情態より考ふれば、身を律するの嚴なりしを認めざる能はず。彼の愉快を感じずるは富貴に在らず、無上の權を振ふに在り。歳三十にて殂し、能く彼の如きを致したるは偶然にあらず。奈破崙の幸福なるは十七歳までなりといふものあるは、即ち爾後野心に驅られて東奔西走し、一日も心の安寧を得ざりしを指すなり。されど奈破崙の愉快を感じずるは、安樂の生活より寧ろ南征北伐の間に存せしにあらずや。肉體に苦痛あれど、己の力を伸ばし得る處に満足を感じたるならん。彼は一種の理想に生き、

之に近づくを以て満足せしもの、その羅馬を模範とし、世界の地圖を改め、永遠の平和を計れる、實に時代を超越せる觀あり。衣囊にホーマーを置き、劍を以て世界を切り從へんとの抱負を遂行せんとし、胸中の悶々たる時には、涌くが如き智略とアルプスを抜く勇氣とに快感を覺えたるべく、遠洋の孤島に流さるゝや、居常鬱々たりとはいへ、自ら古の英雄に比較して満足を感じずるものの如し。彼は不可能を追求して智囊を絞りし爲に、どの邊まで人智を働かし得るかを示し、英雄の古代に限らず、後世の古英雄を凌ぐものあるを證明せり。

青年の功名に急なるものは、政治家たらんことを希望するもの多し。何れの國にも法政の學を修むるもの多きは、官吏となり、銀行會社員となる外、比較的功名心を満たすべき門戸の開かれ居るが故なり。山高ければ麓廣し。高き位置にあるが故

ピット
英國の政治家。(西曆
一七五九—一八〇六)

カヴール
伊國の政治家。(西曆
一八〇一—一八六三)

諸葛孔明
名は亮、蜀の劉備の
臣、建興十二年(西曆
三三四)歿、年五十四。
オーレリウス
羅馬の皇帝。(西曆二
一—一八〇)

に麓に集まる者甚だ多し。されど高き位置に上れる政治家に
何の快樂あるかといへば、世俗の所謂快樂を得ることは少し。
後世に欽慕せらるゝ者は、特に然り。奈破崙に對抗して英國の
權威を維持せしウイリヤムピットは獨身にして、國家を以て妻
とすと稱し、收入を擧げて政治の事に投じ、爲に負債山の如くな
りき。伊國の建設に方り、獨り國政の整理に任せしカヴールは、
同じく國家を以て妻とすと稱せり。大いに富み大いに驕らず
んば、高き位置を占むる効なしといふ者あれど、かゝる事に歡樂
を求むる徒は、政界に飛ぶとも纔に蝙蝠の飛ぶが如し。大政治
家の愉快は、我が施設の効顯れ、幾分にては國家社會の進善せん
とするを見るに在り。古代には諸葛孔明の如き、又マルクスオ
ーレリウスの如き傑出せるものありき。
器械の應用は近世に入りて加速度の進歩を遂げ、商業・工業・農

パリン
佛國の陶工。(西曆二五
二〇頃—一五六)

彼も人
彼も人ナリ、予も人
ナリ、彼是ヲ能クシ
而シテ我乃チ是ヲ能
クセズ、早夜以テ思
フ、其ノ舜ノ如クナ
ラザル者ヲ去リテ、
其ノ舜ノ如クナル者
ニ就カン。(唐ノ韓愈)

業は之が爲に重きを加へ、嘗て立功家として軍人及び政治家を
推したるもの、今は之に商業家・工業家・農業家等を加へざるべか
らざるに至れり。貧困は發明に必要ならず、富みて新工夫を運
らししあり、貧困を忍びて成し遂げし事業の價值の少きもあれ
ど、新發明・新工夫の記録は、半面より觀て貧困との争闘なり。パ
リンの如きは一の極端なる例とすべし。實際に於て、勇者は
世に益すること多きにもせよ、後人を感奮し努力せしむるは、一
切を放擲して事に専らなるものの傳記にして、事業としての直
接利益の外、間接に人心に益する所多し。「彼も人、我も人、我豈彼
の如くなるを得ざらんや。」と、後人の發憤するは、富貴にして歡
樂に耽る所に在らず、己の爲すべきを信じ、斃れて後已まんとす
る所に在り。爲に人は往々立德の事に考へ及ぶ。
帝王は一世の尊、而も孔子の廟に跪き、釋迦の寺に跪き、耶蘇の

彷彿

會堂に跪けり。個人の勢力にして最も廣く最も久しく影響の及ぶべきものを擧ぐれば、かく帝王を跪かしむる立德家なりとすべく、随つて志の大なる者の以て人生の最大快事とするは、之に彷彿たるに在り。されど、彼等がたとひ能く立德家の如くなるを得たりとて、果して愉快なるを得べきか。功名心の熾なるものは、後世に於ける勢力の孔子・釋迦・耶蘇の如くなるを欲しつ、現在に於て孔子・釋迦・耶蘇の如き不遇又は不快なる生活を送るを欲せざるべし。もと立德は人生の美點を綜合して考へたるもの、人生の完成を以て衆徳を具ふるにありとし、暫く史的人物を藉りて之に充つるのみ。人生最上の目的は立德なりと雖も、立德家たらんには如何にせば可なるかといへば、容易に解答を與へ難し。分け登る麓の路は多けれど、同じ高嶺の月を見る、立德は高嶺の月なり。而して麓の路の最も主要なるものは、實

に立言及び立功に在り。立言に種類あり、詩あり、文あり、藝術あり、科學あり。立功に種類あり、軍事あり、政治あり、商業あり、工業あり、農業あり。之を細分すれば頗る多數に上るべけれど、其の孰れかを念とし、十分にその能力を伸ばさば、幾許か立德たるを得ん。

高山の絶頂は寒冷にして風強く、久しく居るに堪へず。而も健脚なるものは、麓にありて百花の咲き亂るゝを觀て満足せず、必ず蒼空を凌がんことを期す。歡樂は麓にあり、安樂は麓にあり、日常の愉快は悉く麓にあり。されば他人より身體の强健にして、女兒の楽しむ所の外に出でざるは、聊か物足らず覺ゆべく、時に餓を忍び、寒に堪へ、絶頂に至りて千里一望の快を恣にせんとす。或はアルプスを低しとし、全く人跡を絶てるヒマラヤ山に登らんと企つ。而して若し幸にその上に立たんか、千古の氷

形而下
形而上

雪萬里に互るを見て、壯絶、快絶、壯絶々を叫ばん。女兒も之を聞いて、地球の最高處に立つの如何に愉快なるかを想像し、唯己の企て及ばざるを歎ぜん。蓋し形而下の快事は多數の求むる所にして、形而上の快事は少數の求むる所なり。而も求むると求めざるとの差こそあれ、形而上の快事を以て人生の最大快事なりと認むるは、古今に通じ東西に互りて動かすべからざる事實なり。

(日本及び日本人)

藤村作
文學博士、東京帝國
大學教授

一八 日本文學研究の新意義

藤村作

我々日本國民に取つて、生命の糧であり力であるものは國文學である。取出しても／＼盡くることなく、一時代から次の時代へと、絶えず我々の内的生活に糧を供してくれる寶庫は、我が二千年來の國文學である。我々は、國文學を知り、國文學に親しむことに由つて、常に日本國民たる生命を新たにして行くことが出来る、眞の日本國民として、反省と自覺との機會を與へられてゐる。我々は生まれて日本民族である、日本國民である。何としても他の民族ではあり得ない、又他の國民ではあり得ない。それは偶然に日本といふ國土に生まれたが爲ではない。日本民族の血を引き、日本國民の生命を生命として享けてゐるからである。血は争ふべからざるものである。血に由つてなされ

有機的結合

てある國民の結合は、無機的な結合ではない。有機的な結合に成れる國家は、機械的な國家ではない。争ふべからざる血は、特殊なる民族性を作り、民族精神を作り、この民族性、民族精神が有形に又無形に國家を形成してゐる。我々は、日本民族として生くる外に、生くべき道は見出し得ない。而して、國家に由つて、民族共有の生命の實現に努め、民族精神を世界に擴充するを圖ることが、我々の個人として又國民として生くべき唯一の道である。

國民の文學は、國民の精神をさながらに寫した鏡である。か
るが故に、英吉利文學は英國國民にとつて最も尊い文學である。
佛蘭西文學は佛國民にとつて最も大切な文學である。獨逸文學は獨國民にとつて最も愛すべき文學である。我々日本國民にとつては、日本文學の外に、世界の何處にもより以上に尊い大

古典文學

切な愛すべき文學はあり得ない。我々は、自己の生命を他人のそれに比較してこれを評價するやうな、自己に冷酷な所爲はしたくない。我が國民精神の表現である國文學を、外國文學に比較はしても、その價值の比較には及びたくない。よしそれが高く評價されようと、低く評價されようと、國文學は我々日本國民の爲には唯一のものであり、如何ともし難いものである。我々はその本質を究め、益、これを充實せしめ展開せしめることに努めればよい、又それより外になすべき道は持たない。我々は、我々に生命の力を與へてくれる二千年來の歌人、物語作者、隨筆日記の筆者、軍記物語の著者から、近世の各種様式の文藝の作家達に、心からなる尊敬を捧げたい。そしてそれと同時に、古典文學の筆寫、蒐集、整理、訓點、註釋、批評の業に従事して、我々に古典文學に親しみ得べき便宜を與へてくれた國文學者達にも、同様の敬

意を保ちたい。

文學に國境は無いやうにいふ人もある。或程度までは承認さるべき事である。併し又一面から言へば、民族的國民的の血の色は鮮やかなものは文學である。國語は國民の内はその職能を全うするばかりでなく、その國語を解するものには、外國人にも同様に、その職能を盡くし得る。とはいへど、單語文章の持つ意味はとにかく、その中に脈打つてゐる全精神を些の遺漏なく理解し得るものは、その國民を措いては決してあり得ない。かるが故に、英吉利文學は英國國民をして研究せしめ、佛蘭西文學は佛國民をして研究せしめ、獨逸文學は獨國民をして研究せしむるが、最も適當であることに論はないが、民族關係の複雑であり、國際交渉の古來久しく、國語組織の甚だ相似た西洋諸國民の間に於ては、外國人で他國文學を研究することも妨ないかも知

れない。併し、我々のやうに特殊な民族性を有し、特殊な國家を有し、世界の國際關係から久しく隔絶されて、特殊な生活を營んで來た國民の文學系統を異にした特別な組織を持つてゐる國語に表された文學は、特に國民の色の鮮やかなものであることは言ふまでもない。随つて我が國文學の研究は、獨り我々日本國民のみ成し得べき業ではあるまいか。

我が國民の過去を振り返つて見ると、亞細亞大陸地方から、支那や印度の先進文化を始めて我が國に輸入したのは、甚だ遠い昔のことである。その時代に於ては、我が國民はまだ素樸の狀態に在つたから、彼の國の文化の燦爛たる光輝に接しては、驚異から羨望崇拜の心に向けて、熾にこれを輸入し模倣した。内なるものを省みてよくこれを育みそだてるに遑なく、彼に學ぶことに努めた。制度に於て、服飾・家屋に於て、藝術に於て、彼の影響感

化を受けた所は甚だ多かつた。學問思想文學に至るまで追隨と模擬とに力を致してゐた。これが爲に、當時の文化は國民の獨創力の甚しく缺乏したもとなつてゐた。かくして國家を支配した政治の實權は、貴族階級から武士階級へ移り行き、王朝時代、武家時代と時代は變り行つたが、外國崇拜の精神は絶えず續き、拜外の迷夢は依然として國民の間に覺めなかつた。

偶、江戸時代にいたり、徳川幕府は外國交通の道を杜絶したけれども、多年彼の感化を受けてゐた國民は、相變らず拜外の夢に酣醉を貪つてゐたが、その時代の精神の中から、ゆくりなく復古の唱道の聲が聞え出した。「古に復れ」といふ聲が、天籟の如く國民の耳朶に響いて來た。復古の精神は、昔のまゝの社會を再び此の地上に現さうとする精神ではない。古代の素樸な精神の中に、人間の眞精神を見出し、日本人の眞の相を見出して、それに

酣醉

耳朶

賀茂眞淵

通稱岡部衛士、遠州の人、國學者、明和六年(一四三九)歿、年七十三。

提唱

古事記傳

四十八卷、古事記を註釋詳解した書

復らうとする精神である。長い年月の間に、知らず識らず人間性の眞から離れて來てゐる生活を、自覺的に本來の人間性にひき直さうとする精神である。外國他民族の感化影響の爲に晦まされた民族特有の精神の發揮に返らうとする精神である。「古に復れ」といふのは、人間本然の性に復れ、民族本然の相に復れといふのである。賀茂眞淵は、人間の眞の精神を萬葉集に見出して、萬葉集の研究、萬葉風の和歌を提唱し實行した。本居宣長は、日本人の眞の相を古事記に見出して、古事記傳の著述にその生涯の大部分を捧げたのである。

これ等先覺の提唱や實行に由つて、拜外の迷夢は一部破れかけたのであつたが、江戸末期に至つて、外國の要求に迫られて已むを得ず、當局は鎖國の制を撤廢して、こゝに西洋諸國との交通が開かれた。こゝに於て、西洋文化を我が國民の眼から覆うて

ゐた幕は切つて落されて、我が國民は再び外國文化の光に眩惑されてしまつた。國際的地位を高め、國力を増進して、彼等と世界に對立するには、先づ彼等の所有するものを我に得なければならぬと知つた敏捷な我が國民は、一千餘年前の國民がなしたと同じやうに、外國文化の輸入模倣に努力した。さうして今日に於ては、最早その點では多く彼に劣る所なきまでに漕ぎつけたのである。拜外の精神は、對象を異にして又熾に動き始めた。かくて夢から夢へと移り來つて、今なほこの夢を續けてゐる。此の夢の中に明治も大正も過ぎて、昭和の御代となつた。世界大戦争は、いろ／＼の意味で世界の劃期的大事件であつた。此の事件に覺醒され刺戟されて起つた改造の機運は、今や世界に充滿して、各方面の改造、今現にその途上に在ると見ゆるのである。西洋文化の真相が此の大事件に由つて遺憾なく暴

劃期的

露されて、これに對する批判の眼が冷やかに輝き始めた。そして明らかにその弱點を認識するに至つたのである。それと共に、これまで多く閉却されてゐた東方文化が、世界の注視の的とならうとしてゐる。物質的から精神的へ、分析的から綜合的へと、學界の推移し行かうとする傾向が見え出して來た。數年前から西洋學者の東洋研究、日本研究に向ふ傾向はこれを語る事實である。

今や世界國際の關係、國民の交渉は、實に近く且密である。一隅を叩けば他の隅々へ直に響を傳へる。我が國に於ても、時を同じうして、各種改造運動と共に、古典復興、國文學研究の風潮が何處からともなく起つて來た。拜外の迷夢は先づ若い人達の中から覺めかけて來た。老年達が無自覺に拜外の鈍い空氣の中に逡巡して、舊習舊慣の保守に腐心してゐる中に、却つて若い

復古精神
 荷田春滿
京都稻荷社の祠官、
 國學者、元文元年(三三三)
 歿、年六十九。

人達の中に自覺的な活動・思索がいろ／＼と起りかけてゐる。改造の聲の中に、外國の束縛を脱して、自國民の生命を擴充して行かうとする聲が聞かれる。この強い精神は、老人達の中であつて若い人達の中に聞かれる様になつた。新忠君論、新愛國運動は、若い人達を中心として起つたものではあるまいか。自國を凝視し、日本國民自身の眞の相を見出さうとしてゐる熱意は、確に若い人達の中に動き始めたものである。この熱意は、少數専門學者の提唱・宣傳に基づく一時的の現象ではあるまい。それは若うして西洋文化の研究に功を積んだ人達の間にかゝる機運の動いてゐる事實に徴しても知ることが出来ると思ふ。

此の機運は、これを一言に纏めれば、復古精神の勃興である。「古に復れ」「日本國民のその元に復れ」「外國精神の束縛を脱せよ」といふ精神である。荷田春滿や賀茂眞淵が二百年前に唱へ

平田篤胤
秋田の人、宣長の門
 人、天保十四年(三三三)
 歿、年六十八。

出して、本居宣長や平田篤胤等に繼承されて、大に國民を警醒し、明治維新の大業を成就した根本を培養した精神と同様の精神である。それが今茲に又繰り返されてゐるものといへる。江戸時代の復古主義者には、世界知識の狭かつた爲に、固陋な偏見に捉へられた弊があつた。今日の復古精神には、此の如きものを含んではならない。復古精神は、舊い昔の社會や生活をさながらに今日に移さうといふのではない。古代生活や古代文化の中に見出される人間の眞の精神、日本國民の眞の相に復歸しようとする精神であらねばならない。因襲の世界から本然の世界へ、いびつの世界から正しき世界へ、虚偽の世界から眞實の世界へ復らうとする精神であらねばならない。而して、かゝる人間の眞の精神、日本國民の眞の相は、これを古典文學の世界に見出すべく、本然の世界正しき世界眞實の世界はこれを文學の

因襲の世界
 本然の世界

中に見出すべきであるから、復古精神には古典への憧憬、國文學探究の精神の伴なふを常とするのである。

斯様にして、復古精神の勃興、古典復興の新現象に促されて、國文學の眞の光が次第に世に出でつゝあるの事實を見るのではあるが、なほ我々學徒の爲に残された未開墾の荒蕪地も少くないし、新考察、新研究に遺された餘地は極めて多いのである。獨り學者研究の餘地が多く遺されてゐるばかりでなく、民衆理解には更に多くの餘地の存することを思ふのである。専門學者の努力は、その方に向つても前途遼遠の感を免れないのである。

(日本文學講座)

「上古時代概観」

「飛鳥朝を境界として二期に分つ」

一九 上古・中古文學

上古とは太古から奈良朝の末期までを含む。この時代は文化なほ未だ一般に徹底せず、外邦文化は移入せられたとはいへ、國民思想の根柢に深く影響を及ぼしたとも考へられない。固有の國民精神が最も眞率に文學の上に反映してゐたと見てよい時代である。この時代は、文學史上大體天武・持統・文武三帝の飛鳥朝を境界として、前後二期に分つことが出來よう。

「太初に道あり、道は神と偕にあり、道は神なり。」と、ヘブライの聖徒はいつたが、我等の祖先の間にも、またかうした思想はあつた。「神代よりいひつてけらく、そらみつ倭の國は皇神のいつくしき國、言靈のさきはふ國。」と、萬葉人の歌つてゐるのは、やがてそれである。要するに、言靈とは上代人が言語にあると信じた

〔祝詞〕

神祕性に外ならぬ。彼等は既に言靈を信じた。故にわれに敵對する仇人の上に災禍あれと願ふ時にも、また自他の上に吉祥を請來しようと思ふ時にも、彼等はこれに縋つてその目的を達し得ると信じた。「のろひまたいのり」といふ語に共通する「のり」といふ語の意義に想到する時、そこに言靈の發動を見ること^{が出来る}。

祝詞のりとは、この言靈の信仰が、祭祀と結びついて發達した文學である。即ちそれは國家的祭祀にあつて救命を奉じて神祇に奏し、若くは神前に集まつてゐる羣臣神職等に讀み聞かせる祭神の詞で、その淵源は祭祀の起源と共に、遠く有史以前に溯るべきものと考へられる。現存の祝詞は後世の筆録にかゝるが故に、それは必ずしも原形のまゝだと考へられないけれども、その性質上大體に於て古體を存してゐると信じてよ

〔歌〕

からうし、ほゞ大寶令の前後には、今日のやうな祝詞は出來てゐただらうと古人も考へてゐる。

神人交渉の文學である祝詞と並んで、古代人の間にはまた人交渉の文學も生まれたことは自然の數である。それは即ち歌である。

歌は本邦文學史上最も重要な地位を占め、過去の殆どすべての文學は、これと何等かの點に於て相交渉せぬものはないといつていゝ。傳説によれば伊邪那岐伊邪那美の二神が天の御柱を繞つて唱和し給うたのが、その濫觴だといふが、その當否はともかくも、かうした感情の高まりに於て自然に發せられた嘆聲が、自ら一種韻律的のひびきをなすところに、歌の萌芽はあつたものではないだらうか。そして年月と共に漸次彫琢と鍊磨とが加へられるに及んで、歌の形式が整正せられ、内容もますます

「古代人の心境」

藝術的に發展していったものであらう。

古代人の心境は單純であるが故に、歌に於けるその感情の表現もまた幼稚であることを免れない。それと共に、また露骨であり、直截である。故に藝術としては完成の域を去ること遠きは已むを得ないところではあるけれども、それらはえもいはぬ迫力の伴なうてゐることも、また争ふべからざる事實である。彼等の生活の中心は鬪争と愛憐とであつた。しかもその歌ふところは勝利と陶醉とであつて、敗北と悲哀とはその内容でなかつたことも注意せらるべきである。

抑も、本邦の古代には文字はなかつた。神代文字といふものの存在を高唱する學者もあつたが、その論據は漠として捉へどころのないものであつた。文字は多く三韓を通じて入つて來た支那文化の齎した賜物である。その傳來が果して何れの年

「文字」

であつたかは知り難いけれども、史上に明徴のあるのは、應神仁徳の朝以後である。しかし履中天皇の御宇に諸國に國史を置き給うた際にも、それに任ぜられた者は歸化人であつたことに見ても、文字が邦人のものとなるまでには、かなりの歳月を要したことは知られる。欽明天皇の朝に佛教が將來せられ、後になつて、文字は一般に親しまれるやうになつて來た。

支那及び印度の文化が傳來して歳月を経るにつれ、本邦の文化もまた異常の發展を見、諸般の制度、文物その面目を一新したかの觀があり、殊に美術、工藝の發達は驚異に値すべきものがある。しかもその文化の恩澤に浴する者も極めて狭い範圍に限られ、且外邦思想の影響も、多くは表面的にとゞまつて、内面的に深刻には及び得なかつたことは注意すべきである。

飛鳥朝から奈良朝に互る約百年間に、本邦文學史は第一次の

「支那文化及び印度文化の影響」

「第一次黄金時代」

黄金時代を迎へたと見てよい。前期以來發達の道程を辿つてゐた漢字の使用法は、本期に入つてますます自由を極め、驚くべき巧妙の域に達した。かくて、それを驅使して前期の末頃から本期にかけて、幾多の述作がなされたことは想像するに難くない。その今日に残されたものだけでも、史籍地誌詩集歌集等數十卷に及んでゐる。盛んなりと謂つてよい。今、その代表的の二者を語らう。

古事記

その第一は、古事記である。天武天皇は諸家齋すところの帝紀及び本辭の多く虚偽を加へてゐることをなげかせられて、修史の事を起し給うたが、天皇の崩御と共に、御雄志も中道にして頓挫したのを、元明天皇がその御志を紹いで太安麿をして撰録せしめ給うたのが、本書である。かくてその中核をなす主題は、皇室を中心として國家組織を闡明しようとする點にある。大

萬葉集

和民族の發生から、民族鬪争へ、そしてやがて國家の統一へ、かくて、我が大和朝廷の稜威の四海に光被するに至つた徑路を明らかにせんが爲に、神話傳説を經とし、史實を緯とし、遊離説話を以てその間を點綴して、一大敘事詩が展開して行くところに、神典として以外に、古事記の文學的價値が存するのである。

その第二は、萬葉集の結集である。萬葉集二十卷四千五百首の長短歌こそは、この期に發達した歌の總集である。誰がいつの世にこれを集めたかは、なほ定説がない。今、本集の歌を見るに、前代の歌は殆どすべて作家の生活に即した主觀詩であつたが、當代の作家は、その眞率な情感を歌ふと共に、自然を靜觀する餘裕をも生じ、また極めて少數ながら深く人生を省察する者さへも出るに至つた。これ明らかに漢詩文や佛教思想に影響せられたところであつた。なほ長歌に伴なふ反歌、さては應詔題

「偉大な作家」
柿本人麿
山邊赤人

詠等の作の盛に行はれたことなども大陸の文學から被つた影響であつた。

この時代の歌は、ほゞ天平時代を境として前後二期に分けることが出来る。前期に於ては、まづ持統文武の朝に出た柿本人麿が偉大な作家として數へられる。彼に次いで天平の初年まで生存してゐた山邊赤人また彼と相如く聲價を得てゐる。しかもこの二家は全く作風を異にし、前者が抒情的作風を以て當代に獨歩してゐるに對して、後者は敘景的作品を以て優秀な地步を占める。その他山上憶良、大伴旅人等またこの二者に多く譲らぬ特色ある作品を後代に遺してゐる。如上の作家羣の世を去つた後に來るのが後期で、その中心作家は大伴家持であつたが、要するに前期に於てほゞ完成の域に達した作風を、後期の作家達はたゞ述べてのみ行くかの觀がある。併しこの時代

山上憶良
大伴旅人
大伴家持

「中古時代の概観」

の歌が今日に遺されたのは、彼等の努力に俟つものが多かつたといつてよい。

桓武天皇の平安奠都から源賴朝の鎌倉幕府開設に至る約四百年を、こゝに中古と名づける。平城京から平安京へ都が遷つて、前代の權門は多く失脚し、獨り榮えたのは北家藤原氏である。この時代の文學は藤原氏と共に終始してゐる。即ち藤原氏の基礎が確立した清和天皇の朝に復興の曙光を見、その威勢漸く加はり、次いでその最高潮に達した醍醐天皇から後一條天皇の御宇にかけて、文學またその妍を競ひ、爾後衰頹の運を辿りつゝ、院政時代に入つては、殆ど強弩の末勢の悲哀を見せて、次代へと推移してゆくのである。

前後四百年、その間武を邊境に用ひたことも一再ではなかつたが、都人士はひたぶるの太平を楽しんだ。上代樸野の風は銷

「貴族文學」

磨せられて、文雅の風は滿朝に及んだ。しかも庶民に至つては、文化の餘澤すら霑ふことが出來ず、永へに社會の下層に沈淪して、貴族の頤使に甘じてゐなければならなかつた。かくて當代の文學は徹頭徹尾貴族の文學であつた。

政權を私した彼等には、家門の繁榮のためには、何物をも犠牲に供して顧みない。阿附迎合黨同伐異は彼等を繞る殆どすべてである。そしてその日常は煩瑣な儀禮と、それに附隨して管絃の演奏と詩歌の贈答とばかりであり、その多くは徹底した眞劍味を缺いた遊戯的なものであつた。

「佛教思想の浸潤」

當代の人士はまた佛教にも多大な關心を有つてゐた。南都の佛教は衰へて、それに代つたものは最澄空海によつて將來せられた顯密二教であつたが、その事とするところは國利民福の大から、治病安産の小に至るまで、多く現世の利益に係つてゐた。

「漢詩文」

が故に事相の隆昌はあれど、教相の研究は寧ろ忽諸に附せられたるかの觀があり、僧侶等また權門に阿附して、その庇護の下に世間的榮華を貪る者多く、人心の祕奥に深き影を投ずることはまだ認め難かつた。

既に述べたやうに、當代の初頭文壇に勢を張つてゐたものは漢詩文であつた。漢詩文は、近江朝頃から漸く盛大となる機運に向ひ、奈良朝時代に於て、かなり廣く行はれたが、その甚しく隆盛を極めたのは嵯峨淳和兩帝の御宇であらう。上に英邁嵯峨天皇おはしました、下に英才空海篁等出でて新京の文運は實に惠まれたものがあつたと稱してよい。詩集、また前代に出た懷風藻に次いで、弘仁・天長の御代に凌雲・文華秀麗・經國の三集の敕撰をさへ見た。

しかし、漢詩文は到底外邦の詩である。衷心の感懷は、これを

懷風藻
凌雲集
文華秀麗集
經國集

〔和歌擡頭の機運〕

盛るに外國の言語外國の詩形を以てすることの不自然であることは言を俟たない。かゝる情勢の中に、多年漢詩文に抑壓せられて來た和歌の再び擡頭すべき機運が醸成せられつゝあつたのである。かくて遂に六歌仙の時代が歌の歴史の上に来たのである。六歌仙の時代とは、清和天皇から宇多天皇に至る時代を包含すると見てよい。奈良朝の末期から雌伏してゐたとはいへ、一歩々々力強き歩みをつゞけて來た歌が、再び表面に現はれた時には、萬葉集の歌に比べて甚しく繊細にして優麗な趣致を帯びてゐたことを感じる。在原業平・僧正遍昭・小野小町などは文學史に特殊の光彩を放つ作者である。

〔假名文字の制作〕

なほ國文學の振興に與つて力あるものは假名文字の發達である。漢字を假りて國音を寫さうとしたのが假名の起源で、その源流は、現存の資料を以てしても、なほ且遠く推古天皇の御宇に溯ることが出来る。しかし全く漢字の原形から離れて國字の體をなしたのは、ほゞ當代の初期であつたと考へられる。殊に草假名に見られる流麗さこそは、恐らく中古の國文學を通じて流れる氣分を最もよく象徴するものであらう。

〔散文の文學〕

假名文字の制作と共に發達したものは、散文の文學である。古事記は叙事詩の上乗なものではあるが、今日ではその全部を正確に當時の言語もて讀むことは恐らくは不可能のことであらう。眞にその時代の國語もて書かれた散文の文學は、中古期に入つて始めて出たといふも、必ずしも誣言ではない。現存の竹取物語は、その意味で本邦最古の散文の文學と稱してよい。竹取物語は多分に童話味を帯びた興味ある物語で、佛典や神仙談などに影響せられたこと多大である。これと並んで當代のものとして考へられる作に伊勢物語がある。彼が一貫せる構想の

竹取物語

伊勢物語

上に立つ傳奇であるに對して、これは個々の歌に聯關せる小話を集めて、その大部分が同一の主人公を共有してゐるといふにとゞまる、所謂歌物語である。そしてこの二種の物語は、後に續出する物語への歸趨を暗示してゐる點に於て特に價值多いものである。

平安朝の初期から宇多天皇の御宇までは、要するに次いで來るべき黄金時代に對する準備時代であつた。寛平六年菅原道眞の奏請によつて、遣唐使が廢止せられたことは、邦人が漸く大陸文化から離れて、獨自の道に進むよき機會を與へたと考へられる。その前後から從來鵜呑みにして來た大陸文化は咀嚼せられ、消化せられて日本化せられたことは、生活様式の上に、美術工藝の上に、明らかに看取する事が出来るが、文學の上にも、また同様の情勢が見られる。醍醐天皇の御代から後三條天皇の御

「歌の時代」
古今和歌集

代頃まで、約二百年を平安朝文學の最盛期とする。この二百年を前後二期に分けて考へると、延喜天曆を中心とする約百年は歌の時代であり、道長時代を中心とする約百年は物語の時代である。

歌の時代はまづ古今和歌集の撰進に始まる。撰者の一人なる紀貫之が書いたといはれる序文は、實に彼の抱負を窺ふべき大文字である。劈頭まづ「やまとうたは人のこゝろをたねとして、よろづのことはとぞなれりける。」といつた「やまとうた」といつたところに、明らかに漢詩に對抗して歌の地位を確保しようとした意氣が燃えてゐるやうに思ふ。從來漢詩に對して甚しき卑下を感じてゐたであらう歌の地位は、こゝに彼と少くとも對等のものとなつた。詩の六義を歌に固有のものであるか

にいつて「からのうたにもかくぞあるべき」といつたのは稚氣満

満たる表現ではあるが、これまた已むに已まれぬ作者胸奥の不
平の迸りと見れば深く咎めるには及ばないであらう。とにかく
く、本集敕撰の事によつて、歌は従來の漢詩の地位にとつて代る
こととなり、爾後數百年に互る歌集敕撰の基をなしたのである。
たゞその歌は上代に見るやうな眞率さは失せて、著しく思惟的
理智的な傾向が現れて來たけれども、大體に於て典雅純正な抒
情詩が完成せられて、後代の歌人の進み行くべき道が擧示せら
れたのであつた。

御堂殿の代を中心とする物語の時代も一朝にして成つたも
のではなかつた。竹取物語の後、物語の制作が相次いだことは
諸書に散見する書名を見て知ることが出来るが、現存の宇津保
落窪等の物語に見て、そこに著しく寫實味の加はつて來たこと
が注意せられよう。また日記と名づけて、我が過ぎ來し方の追

「物語の時代」

宇津保物語
落窪物語

源氏物語

憶をものすることも行はれたが、これらは日記とはいへ、甚だ物
語風な所謂私小説に類する作品である。これらいろいろの作
品の後をうけ、それらの要素が合して一になつたところに、源氏
物語が生まれ出るのである。

源氏物語が紫式部の作であることは定説である。恐らくあ
の大作が一時に出來たとは信じられないが、一條天皇の寛弘年
間には、少くともその一部分は宮廷の間に行はれてゐたことは
確である。この物語は大體二部に分つことが出来る。即ちそ
の第一部は前四十一帖で、光源氏君を主人公とし、第二部は後十
三帖で、光君の子薫大將を主人公としてゐる。さて、この作者の
意圖がいづれにあつたかは、古來學者の論議の種となつてゐる
ところではあるが、讀者をして、あるがまゝの平安朝貴族の生活
はかくもあつたらうと首肯せしめるところ、作者の寫實的筆致

枕草子

は驚くべきものがある。その描寫は微に入り細を極めて、情景二つながら生動し、人物の性格もほゞ書き別けられ、事件の推移も極めて、自然である。約千年の昔に一巾幗の手に、かくの如き大作が成されたことは、實に世界文學史上の一大驚異である。源氏物語と並んで平安朝文學の一傑作は枕草子である。清少納言のものとした隨筆であるが、その犀利な觀察と冷徹な批判とを、作者独自の文章をもて行つたところ、何人も容易く企及し得ない才筆で、永く國文學史上の珠玉として光彩を放つべき作品である。

源氏物語以後、小説の書かれたものは數多かつたけれども、その多くは源氏の糟粕を嘗めるもののみで、見るに足るべきものは少い。彼等の中には徒に筋の運びに怪奇を求めてやまず、遂には甚しき不自然をも顧みないものさへ出るに至つた。

大鏡
榮華物語
今昔物語

さしにも榮華を極めた藤原氏も、御堂殿の世を限りとして、一路凋落の道を行つたが、白河院が院中に政を聽き給ふに及んで、ますますその勢を弱め、名は昔ながらに攝關といひ、大臣といふと雖も、たゞ虚器を擁するに止まつてゐた。しかも藤原氏に代るべき新勢力はまだ現れない。過去の盛時をなつかしむ情は大鏡榮華物語等歴史物語を生じ、また次の時代に興るべき説話文學の先蹤として今昔物語集が集められた。しかし、これらのものより文壇的に注目すべきことは、歌がやゝ活氣を帯びたことと、歌論が勃興したこととである。

歌は古今集を宗として、その歌風を踏襲するばかりで、單調な生活から詠み出される作は殆ど變化なく、萎靡沈衰の狀にあり、圓融天皇の御代に曾根好忠がその語彙の上に一道の清新味を加へようとしたのですら、時流からは狂を以て目せられた。一

條天皇の御宇は、文學的に恵まれた時代であり、歌に於ても幾多の優れた作家が輩出したが、和泉式部等少數者を除いては特記すべきものがない。かく行き詰まつた歌壇はいつかは轉回せざるを得ない。その轉回の傾向を窺ふべきものは金葉集である。しかも歌壇の本流はなほ依然として舊に由つてゐるので、外觀こそ頗る盛大には見えるけれども、實質的には頗る索漠たるものがあつた。

制作のあるところに評論の伴なふのは必然の數である。本邦の評論史は、その當初に於ては歌論史であつた。歌が特にその對象となつたのは、歌が最も尊重せられてゐたからである。所謂四家式がどの程度まで信ずべきかは措いて問はぬ、たゞ歌論の濫觴を奈良朝まで溯り、こゝにも亦支那文學の影響の否めないのは事實である。かくて古今集序以後、歌合の盛行につれ

「歌論史」

て歌論はますます行はれ、その結果は歌壇にも黨同伐異の傾向が現れ、源俊賴と藤原基俊とは新舊二派を代表してゐたかに見える。またこの二派の間に介在して、藤原清輔も亦父祖三代の家學を繼承して、後に歌道に門閥を生じる基をなした。かく諸家の風混沌として、歌壇はその適歸するところに迷うてゐた時に出たのが藤原俊成であつた。彼は新舊兩派の門を敲き、諸流の風を涉獵し、これを折衷して、こゝに中正にして優雅な歌風を興した。その成果はこれを後白河法皇の院宣によつて彼が撰進した千載和歌集に窺ふことが出来る。この集は中古時代の掉尾を飾る寶玉であると共に、やがて來るべき歌壇に對する示唆である點に於て特に重要視せらるべきである。

訂新日本讀本 卷十 (終)

常用漢字

(大正十二年五月臨時國語調查會發表、昭和六年五月修正)

(千八百五十八字)

【一】一丁七丈三上下不
世丙並【一】中【二】丸主
【一】之久乏乘【乙】乙九
乞也乳亂【一】了事【二】
二五五井【二】亡交京亭
亦【人】人仁仇今介仕他
付代令以仰仲伴任伊伏
伐休伯伴伺似位低住佐
何余佛作伸使來佳例侍
供依俛侯侵便係促俱俊
俗保俠信修俳依俸碎倉
個倍倒候借偷假偉偏停
健側偶傍傑備催働傳債
傷傾僅像僚僞僧價儀億

儉價優【元】元兄充兆兇
先光克兌免兒【入】入內
全兩【八】八公六共兵具
其典兼【冊】冊再【元】元
【シ】冬冷涼准凌凍【凡】
凡【口】凶出【刀】刀刃分
切刊刑列初判別利到制
刷券刺刻則削前剛副剩
割創劇劍劑【力】力功加
劣助努効勅勇勉勸勤務
勝勞募勢勤勸勵勸【弓】
包【匕】化北【區】區【十】
十千升午半卑卒卓協南
博【卜】占【印】印危却卵

卷卽【厄】厄厘厚原厥
【去】去參【友】及友反叔
取受【口】口古句叫召可
史右司各合吉同名后吏
吐向君吟否含呈吸吹告
咸周味呼命和咽哀品員
哲唐唯唱商問啓善喉喜
喪喫單嗣嘉器噴嚴囁
【因】因四回因困固國圍
園圓圖團【土】土在地坂
均坊坑坪垂型埋城域執
培基堀堂堅堤堪報場塔
塗塵境墓塀增墨墮壁壇
壓壤【士】士壯壹壽【又】

夏【夕】夕外多夜夢【大】
大天太夫央失奇奉奏契
奔奢輿奪獎奮【女】女奴
好如妃妊妥妙妨妹妻姊
始姑姓委姦姪姪姻姿威
娘娛娠娼婚婦婿媒嫁嫡
嫌孃【子】子字存孝季孤
孫學【宅】宅守安宏完宗
官定宜客宣室宮害宴家
容宿寄密富寒察寢寢實審
寫寬寶【寸】寸寺封射將
專尉尊尋對導【小】小少
尙【尤】就【尺】尺尼尾尿
局居屈屈屋展層履屬

【山】山岡岩岳岸峙峯島
【工】工左巧巨差【已】已
【巾】市布帆希帝帥師席
帳帶常帽幅幕幣【干】干
平年幸幹【幻】幼幾【床】
床序底店府度座庫庭庶
康廉廓廢廣廳【延】延廷
建廻【弄】弄弊【式】式

情惑惜惠惡情惱想愁愉
意愚愛感慈態慕慘慢慎
慣慨慮慰慶慈憂憐憚恚
憶憾憤懇應懲懷懸戀
【戈】成我戒戰戲戴【戶】
戶戾房所扇【手】手才打
扱扶批承技抑投抗折抱
抵押披抽拂拍拒拓拔拘
拙招拜括拳拾持指振捕
捧描拾掃授掌排掛採探
控推揚接提換握揮搥揮
援損搯搜搗携摩撫擇擊
操擔據擬擴攝【支】支
【支】收改攻放政故敍教
敏救敗敢散敬敵數數整
【文】文【斗】斗料斜【斤】

斤斤斬新斷斯【方】方施
旋族族旗【无】既【日】日
且旨早旬旭昇昌明易昔
星春昭昨是映時晚晝普
景晴晶智暇暖暗暑暮暴
曆曇曜【日】曲更書曹會
替最會【月】月有朋服朕
朗望朝期【木】木未末本
札朱机朽杉材村束柿杯
東松板枕林枚果枝枯架
柄某染柔查柅柱柳栗校
株根格栽桃案桐桑梅條
梨械棄棋棒棟森棺植楠
業極榮構概樂樓標樞模
樣樹橋機橫檄檢櫻欄權
【欠】次欲款欺歌數歐歡

【止】止正此步武歲歷歸
【歹】死殊殉殖殘【支】段
殺殿毀【母】母每毒【比】
比【毛】毛【氏】氏民【气】
氣【水】水水永汙求汗汚
江池決汽沈沒沖沙汰河
沸油治沼沿況泉泊法波
泣泥注泰泳洋浴海浸消涉
派流浦浪浮浴海浸消涉
液淑淚淡淨淫深混清淺
添減淵渡温測港渴湖湧
湯源準溢溶溺滅滋滑滯
滴滿漁漂漆漏濱漕濃濕
漫漸潔潛湖澤激濁濃濕
濟濱瀧灣【火】火灰災炊
炎炭烈無然煉煮煙照煩

熟熱燃燈燒營爆爐【爪】
爪爭爲爵【父】父【爻】爾
【片】片版牌【牙】牙【牛】
牛牧物性特犧【犬】犬犯
狀狂狩狹猛猫猶獄獨獲
獵獸獻【玄】玄率【玉】玉
王玩珍珠班現球理琴環
璽【瓦】瓦瓶【甘】甘
甚【生】生產甥【用】用
【田】田由甲申男町畀畏
如畜畝略番畫異雷當疊
【疋】疋疎疑【疒】疫疲疾
病症痘痛痢療癖【登】登
發【白】白百的皆皇【皮】
皮【皿】皿盆益盛盜盟盡
監盤【目】目盲直相省眉

看真眠眼着睡督【矢】矢
知短【石】石砂砲破研硬
硯碁碎碑確磁磨礎【示】
示社祈祕祖祝神票祭禁
禍福禦禮【禾】秀私秋科
秒租秩移稅程稚種稱稻
稿穀積穗穩【穴】穴究空
突窈窕窗窳【立】立章童
端競【竹】竹竿笑笛符第
筆等筋筒答策算管箱節
範築篤簡簿籍【米】米粉
粒粘粗粹精糖糞【糸】系
紀約紅紋納純紙級紛素
紡索紫累細紳紹紺終組
結絕絡給統絲絹經綠維
綱網綴綻綿緊緒線締綠

編綬緯練縛縣縫縮縱總
績繁織繡繪繭線繡績
【五】缺【罽】罪置署罰罵
罷羅【羊】羊美羣義【羽】
羽翁翌習翼【老】老考者
【而】耐【耒】耒耕【耳】耳聖
聞聯聲職聽【聿】肅聿
【肉】肉肖肝股肥肩育肺
胃背胎胞胸能膂膂脊
脚脫腐腕腦腰腸腹膚膜
膝臄臆膺臆【臣】臣臥臨
【自】自臭【至】至致臺
【自】與與舉舊【舌】舌舍
【舟】舞【舟】舟航般舵舶
船艦【良】良【色】色【艸】
芝花芽芳苑苗若苦英茂

茶草荒荷莊菊菌菓菜華
萬落葉著葬蒙蒸蓄蔓薄
藏藝藤藥【虜】虜虐處虛
號【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲
蠶蠶【血】血衆【行】行術
街衝衡衡【衣】衣表袞袋
袖被裁裂裏裕補裝裸製
複褒襲【西】西要覆【見】
見規視親覺覽觀【角】角
解觸【言】言訂計討訓託
記訟訪設許訴診詐詔評
詞詠試詩詰話詳誇誌認
誓誕誘語誠誤說課調談
請論論諸諸謀謁諮講謝
謠謹謬證識譜警譯議護
譽讀變讓【谷】谷【豆】豆

豐【豕】豚象豪豫【貝】貝
貞負財貧貨販貫責貯貳
貴買貸費質質貨賄資賦
賓賜賞賢賣賤賦質賴購
贈贊【赤】赤【走】走赴起
超越趣【足】足距跡路踊
躍【身】身【車】車軌軍軒
軟軸較載輕輦輪輯輪輿
轉【辛】辛辨辭辯【辰】辰
農【毛】込迎近返迫迭迷
迷追退迭迷透透途途通

連造連週進逸途遇遊運
過道達達遙遙遞遠遣適遭
遲遲選選遺避還邊邊【邑】
邦邗邗邗邗邗邗邗邗邗邗
【酉】酌配酒酢酬酷酸醉
醜醫【采】釋【里】里重野
量【金】金釜針鈞鈍鈴鉛
鉢銀鉢銅銘銳鋒銅錯錄
錢鍋鎖鎖鏡鑄鑄鐵鐵鑑鑛
【長】長【門】門閉開閉開
開開關【阜】防附降限陞

院陣除陪陳陰陵陶陷陸
陽隆隊階隔隙際障障隣隨
險隱【隹】隹雀雄雅集雁
雌雙雜離離【雨】雨雪雲
零雷電雷震霜霧露靈
【青】青靜【非】非【面】面
【革】革靴【音】音響【頁】
頂項順順預預頤頤頤頤頤
額額額額額額額額額額額
【飛】飛翻【食】食飢飲飯
節養餓餘餅餅餅餅【首】首

【香】香【馬】馬馳駁駁駁駐
騎騰騷驅驗驗騷騷【骨】骨
髓髓髓髓髓髓髓髓髓髓髓
鬪【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮
鯉鯛【鳥】鳥鳩鳴鶴鶴
【鹵】鹽【鹿】鹿麗【麥】麥
【麻】麻【黃】黃【黑】黑獸
點黨【鼓】鼓【鼻】鼻【齊】
齋【齒】齒齡【龍】龍【龜】
龜

注意

(一) 本表にない漢字は假名で書くこと (二) 固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、た
だし外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること (三) 代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞
および助詞はなるべく假名で書くこと (四) 外來語は假名で書くこと。

略字表

左の字體を本位として用ひること。
(括弧内の小字は字典體)

勸(勸) 權(權) 灌(灌) 飲(飲) 觀(觀)
沢(澤) 沢(澤) 沢(澤) 沢(澤) 沢(澤)
変(變) 恋(戀) 壘(壘) 灣(灣)
莖(莖) 徑(徑) 經(經) 輕(輕)
併(併) 塀(塀) 瓶(瓶) 餅(餅) 研(研)
齊(齊) 齋(齋) 濟(濟) 劑(劑)
殘(殘) 淺(淺) 賤(賤) 錢(錢)
勞(勞) 營(營) 榮(榮) 學(學) 覺(覺)

举(舉) 譽(譽) 斷(斷) 繼(繼)
齒(齒) 齡(齡) 濕(濕) 頭(頭)
窓(窗) 窓(窗) 屬(屬) 嘔(嘔)
為(爲) 偽(僞) 帶(帶) 滯(滯)
參(參) 慘(慘) 兩(兩) 滿(滿)
發(發) 廢(廢) 鼠(鼠) 獵(獵)
乱(亂) 辭(辭) 潜(潜) 贊(贊)
走(走) 徒(徒) 位(位) 縱(縱)
惱(惱) 腦(腦) 処(處) 拠(據)
担(擔) 胆(膽) 耒(耒) 麥(麥)
壽(壽) 鑄(鑄) 數(數) 樓(樓)

文部省檢定濟

用科文漢語國校學中 日八十二月一十年六和昭
 用科語國校學業實 日六月七年八和昭

樂(樂) 葉(樂) 說(讀) 統(續)
 竜(龍) 滝(瀧) 隨(隨) 髓(髓)
 康(鹿) 蕉(麗) 聽(聽) 廳(廳)
 虚(虚) 戲(戲) 遲(遲) 解(解)
 独(獨) 触(觸) 暈(暈) 撰(撰)
 虫(蟲) 蚕(蠶) 仮(假) 兎(兎)
 励(勵) 嘗(嘗) 国(國) 圉(圉)
 口(圓) 囟(圖) 老(壹) 実(實)
 写(寫) 宝(寶) 扣(控) 叙(敘)
 条(條) 様(樣) 帰(歸) 気(氣)
 炉(爐) 犧(犧) 献(獻) 画(畫)

苗(苗) 尺(盡) 礼(禮) 称(稱)
 糸(絲) 欠(缺) 声(聲) 台(臺)
 旧(舊) 万(萬) 号(號) 証(證)
 豊(豊) 弁(辨) 通(通) 辺(邊)
 医(醫) 鉄(鐵) 関(關) 双(雙)
 霊(靈) 余(餘) 館(館) 体(體)
 塩(鹽) 点(點) 覚(覺)
 鬪(鬪) 刺(刺) 龟(龜)

略字表 終

大正十四年十月十日印 刷
 大正十五年一月三日訂正再版印刷
 昭和三年七月二十日訂正三版印刷
 昭和三年十一月一日訂正四版印刷
 昭和六年七月廿八日訂正五版印刷
 大正十四年十月十三日發 行
 大正十五年一月五日訂正再版發行
 昭和三年七月廿三日訂正三版發行
 昭和三年十一月五日訂正四版發行
 昭和六年七月廿一日訂正五版發行
 昭和六年十一月十七日訂正六版印刷
 昭和六年十一月二十日訂正六版發行



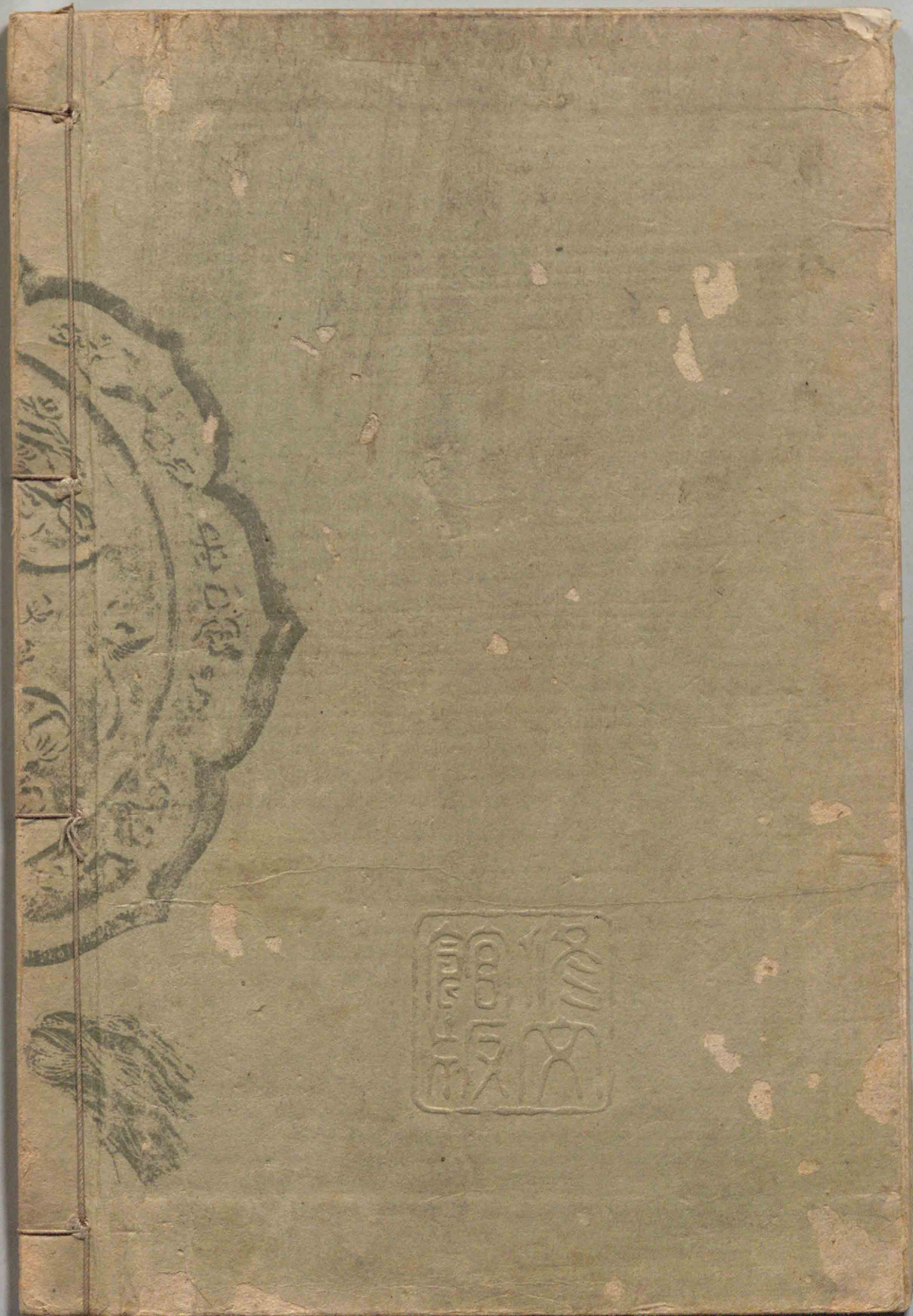
發 兌

振替口座東京二六四四番
 振替口座大阪四七一番

編 者 吉 澤 義 則
 印 發 者 兼 刷 行 者 鈴 木 政 雄
 發 行 者 鈴 木 常 松

訂三	新	日	本	讀	本
價	卷一—六	各	金	六	十
	卷七—十	各	金	五	十五
			錢		

京都市左京區修學院西湊澤町四
 京都市神田區神保町一丁目二五ノ一
 大阪市東區博勞町五丁目五十六番地
 東京市神田區神保町一丁目二五ノ一
 大阪市東區博勞町五丁目五十六番地
 修 文 館



مكتبة
الملك
العثماني